

クロスロード

5



特集1

環境教育分野の活動ポイント

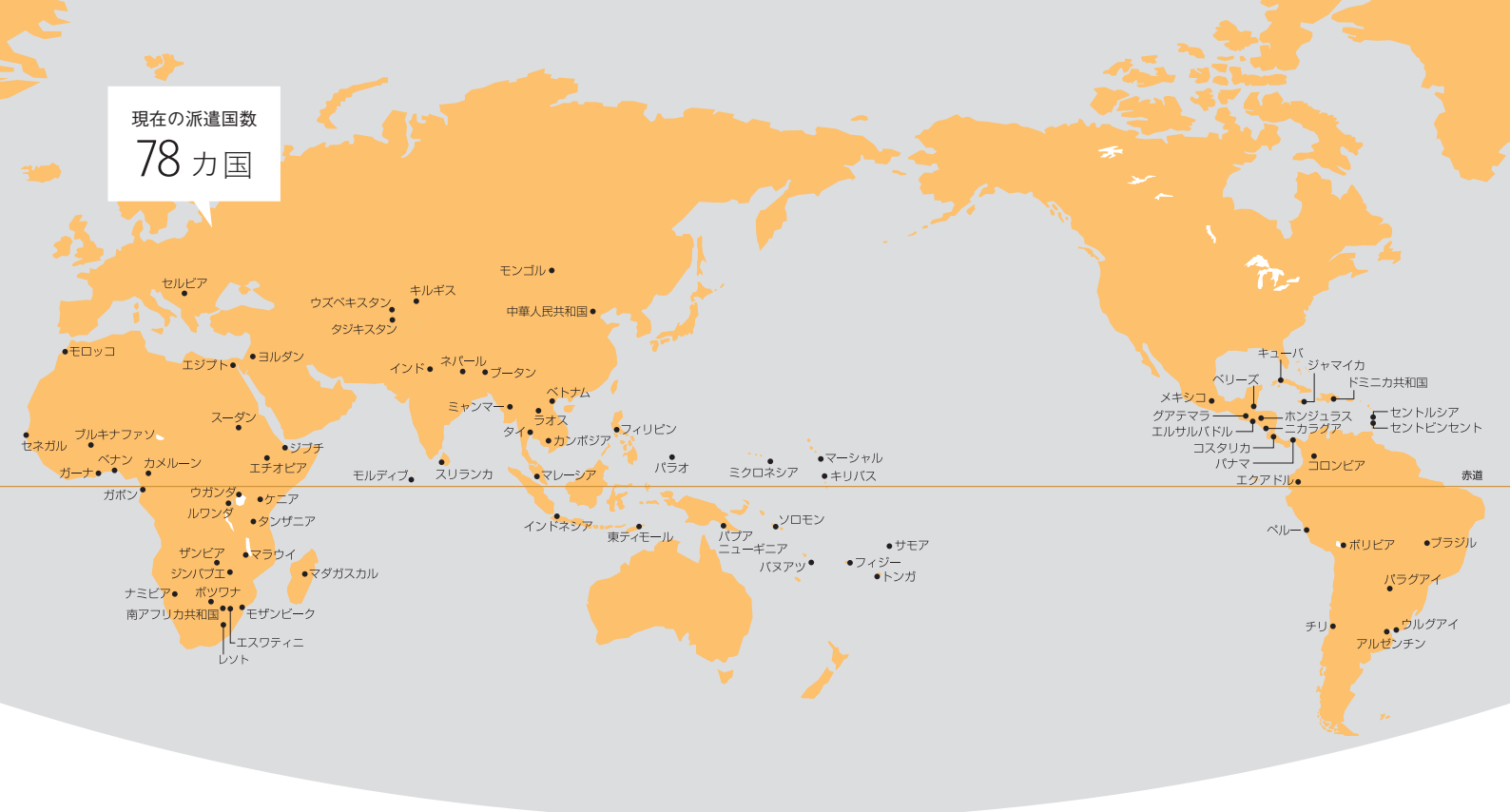
特集2

人間関係改善策



現在の派遣国数

78カ国



JICA海外協力隊 派遣現況

(2019年3月末現在)

■ アフリカ地域

国名	JV	SV
ウガンダ	42	2
エスワティニ	4	1
エチオピア	30	
ガーナ	41	2
ガボン	18	9
カメルーン	22	1
ケニア	37	6
ザンビア	71	12
ジブチ	10	
ジンバブエ	5	
スーダン	21	
セネガル	43	3
タンザニア	58	3
ナミビア	13	
ブルキナファソ	17	
ベナン	46	
ボツワナ	11	
マダガスカル	32	
マラウイ	58	
南アフリカ共和国	5	5
モザンビーク	35	3
ルワンダ	37	
レソト	1	1

■ アジア地域

国名	JV	SV
インド	11	
インドネシア	13	2
ウズベキスタン	22	3
カンボジア	26	10
キルギス	26	
スリランカ	40	1
タイ	30	4
タジキスタン		3
中華人民共和国	11	
ネパール	46	3
東ティモール	31	
フィリピン	25	3
ブータン	18	7
ベトナム	30	16
マレーシア	14	6
ミャンマー	9	4
モルディブ	11	
モンゴル	39	
ラオス	38	3

■ 大洋州地域

国名	JV	SV
キリバス	7	
サモア	23	1
ソロモン	29	5
トンガ	14	2
バヌアツ	13	4
バプアニューギニア	28	5
パラオ	9	5
フィジー	23	3
マーシャル	7	1
ミクロネシア	7	9

■ 欧州地域

国名	JV	SV
セルビア	1	2

■ 中東地域

国名	JV	SV
エジプト	14	3
モロッコ	21	6
ヨルダン	28	

■ 中南米地域

国名	JV	SV	日系JV	日系SV
アルゼンチン		11	6	8
ウルグアイ		7		
エクアドル	48	5		
エルサルバドル	8			
キューバ		1		
グアテマラ	23	3		
コスタリカ	19	9		
コロンビア	12	15		
ジャマイカ	17	12		
セントビンセント	4			
セントルシア	6			
チリ	6	4		
ドミニカ共和国	29	7	4	1
ニカラグア	1			
パナマ	14	1		
パラグアイ	38	2	9	3
ブラジル			69	20
ペルー	13			
ペルー	40	5		
ボリビア	42	2	2	1
ホンジュラス	24			
メキシコ	1	9		

■ 合計

	JV	SV	日系JV	日系SV	小計
派遣中 (男性/女性)	1,666 (720/946)	252 (177/75)	90 (29/61)	33 (11/22)	2,041 (937/1,104)
累計 (男性/女性)	44,777 (23,857/20,920)	6,477 (5,240/1,237)	1,476 (563/913)	542 (252/290)	53,272 (29,912/23,360)

JV = 青年海外協力隊
 SV = シニア海外ボランティア
 日系JV = 日系社会青年ボランティア
 日系SV = 日系社会シニア・ボランティア (単位:人)

クロスロード

2019 MAY

職種別索引	掲載ページ
番組制作	24
木工	26
環境教育	1、6、8、10、12、28、36
理科教育	4
体育	20
小学校教育	14、22
言語聴覚士	25
作業療法士	18
栄養士	4、16
公衆衛生	36

国別索引	掲載ページ
エチオピア	20
カメルーン	1、6、36
ケニア	4
コスタリカ	25
ネパール	36
フィジー	8
ベトナム	18、24
ベナン	14、22
ペルー	10
ボツワナ	26
マラウイ	16
モンゴル	4

出身都道府県別索引	掲載ページ
群馬県	10
神奈川県	14、20、25
長野県	26
静岡県	8
大阪府	6、22
鳥根県	36
福岡県	16
佐賀県	18
宮崎県	24

【凡例】

- ① JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2018年度4次隊）

氏名	派遣国	職種	隊次
----	-----	----	----

※「青年海外協力隊」以外のJICA海外協力隊（「シニア海外ボランティア」「日系社会青年ボランティア」「日系社会シニア・ボランティア」）の方々は、括弧内の冒頭に「SV」「日系JV」「日系SV」と記しています。

- ② JICAの「企画調査員（ボランティア事業）」については、「VC」と表記しています。

本誌は、JICA海外協力隊が現地での活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：S+M DESIGN FACTORY

レイアウト：S+M DESIGN FACTORY

印刷・製本：弘報印刷（株）

4

JICA Volunteers' NEWS

- ▶交通安全ワークショップを事務所・隊員有志と学校のコラボにより実現（ケニア）
- ▶現地教員が共有できる学習指導案を。理科実験書を掲載したウェブサイトを開設（モンゴル）

特集1

環境教育分野の活動ポイント

6

CASE 1 学校での啓発活動

佐藤 翔さん（カメルーン・環境教育・2016年度1次隊）

8

CASE 2 地域での啓発活動

川島 琢史さん（フィジー・環境教育・2016年度2次隊）

10

CASE 3 自然保護区での啓発活動

中村 俊一さん（ペルー・環境教育・2016年度2次隊）

12

活動Q&A集

特集2

人間関係改善策

14

CASE 1 上司との人間関係

齋藤 七海さん（ベナン・小学校教育・2016年度1次隊）

16

CASE 2 同僚との人間関係 ①

木原 悠希さん（マラウイ・栄養士・2016年度2次隊）

18

CASE 3 同僚との人間関係 ②

副島 希望さん（ベトナム・作業療法士・2016年度2次隊）

20

CASE 4 活動相手との人間関係

石井 麻夕さん（エチオピア・体育・2016年度2次隊）

22

“失敗”から学ぶ

生田 卓也さん（ベナン・小学校教育・2016年度2次隊）

24

希少職種図鑑

- ▶番組制作 稲元 浩子さん（ベトナム・2016年度1次隊）
- ▶言語聴覚士 田實 奈央さん（コスタリカ・2016年度2次隊）

26

JICA Volunteer's Before ▶ After ~人生を変えた2年間~

風車メーカー 社員 縣 秀樹さん（ボツワナ・木工・2010年度4次隊）

28

OB・OG匿名座談会

環境教育隊員篇

30

JICA海外協力隊のプチテクガイド

アイスブレイクの手法／アンガー・マネジメント／あるもので日本の味

32

INFORMATION

34

JICA海外協力隊のつぶやき

お題：「初耳」

35

JICA進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役の紹介



第2回目の学校児童向けWSにて交通安全ロールプレイを支援する小川隊員

開催の流れ	
(2018年8月) 企画	交通安全ワークショップ(WS)の企画をJICA事務所職員が構想し、隊員と一緒に企画書を作成。
(2018年9月) 募集	ケニア隊員に声掛けし、交通安全教育に興味関心のあるWS参加者を募る。
(2018年11月) 開催準備	第1回WSの内容を検討し、必要な備品・資材を準備。
(2018年12月) 第1回WS	学校の先生を対象として開催。
(2019年2月) 開催準備	第2回WS実施の小学校の視察と、先生とのWS内容検討。
(2019年3月) 第2回WS	学校の児童を対象として開催。

交通安全ワークショップを 事務所・隊員有志と学校のコラボにより実現

Kenya

文 = 新井ひかりさん(ケニア・栄養士・2017年度4次隊)



第1回目の学校先生向けWSにてプレゼンする(左から)平川隊員、新井隊員、菊池隊員、森隊員

ケニアにおける交通安全ワークショップ(以下、WS)は、日本の無償資金協力によって差があります。黄色信号II「Ready to go」を答える児童が多く、道路を横断する際の左右確認も、手を挙げて横断する習慣もなく、交通インフラ整備に交通ルールの理解が追いついていないとの問題が指摘されています。

このような状況下では、日本の水準で整備されつつあるウゴンゴ道路を安全で快適な人々の交通経路にするために、ケニアの人々への交通安全教育が必要です。特に、道路が綺麗になった一方で、車のスピードが上がった今、周辺の学校に通う児童たちへの交通被害が心配されます。

そこで、まずは第1回目のWSとしてウゴンゴ道路周辺の小学校の先生を集め、ケニアの交通事故などの現状と道路整備プロジェクトについて説明し、日本の交通安全教育を紹介するとともに、ハザードマップづくりのWSを通して交通安全に対する意識向上を図りました。

その際、多くの先生から「自分の学校でもやってみたい」との声が挙がり、特に積極的だった小学校で、第2回目として児童たちを対象に交通安全教育を行いました。小学校の先生からは、「交通安全教育をどのように進めて良いかわからない」という意見も挙がったため、信号機や車、バイクを段ボールでつくり、実際に交通事故にあった児童の体験談から、どのように危険を回避すれば良いかを考えるロールプレイを提案しました。具体的な内容は、先生や児童主体で検討を行うように促し、主体的な検討をお願いしたところ、関係者も驚くほどの劇を披露してくれました。

今後ケニアで交通安全教育が継続され、定着するためにも、子どもの頃から交通安全教育に触れる機会を得ることは重要であり、これはインフラ整備による便益をより確かなものとするにもつながります。隊員とJICA事務所を含む関係機関や学校が連携するといふ今回の活動を通じて、トップダウンでものごとが進むことの多いケニアでも、ケニア人主体の効果的な教育支援ができることを実感しました。今後もお互いに協力し、活動を展開していきたいと思えます。

※参加者(敬称略)：平川知弥(理科教育・2016年度3次隊)、黒田真樹(青少年活動・2017年度3次隊)、新井ひかり(栄養士・2017年度4次隊)、小川真奈(コミュニティ開発・2017年度4次隊)、菊池篤(コミュニティ開発・2018年度1次隊)、森彩華(障害児・者支援・2018年度1次隊)、長岡綾子(青少年活動・2017年度1次隊(ニカラガア・ソーシャルワーカーからの振替派遣))



現地教員に対し、セミナーで理科実験書の使い方を指導する箭木さん(左)と、福島さん(右)

ウェブサイト(HP)開設の流れ	
(1年前) 実験書作成開始	10年前の隊員が全国に配布した実験書を発見し、それを基に実験書を作成し始める。
(9~11カ月前) 市場調査	誰も実験書の存在を知らないことを知る。教員が困っていることに関してアンケート実施。
(5~6カ月前) 調整	アンケートを基に実験書を広める方法について検討会議。
(4カ月前) 情報収集	実験書配布方法について教員を対象にアンケート実施(首都、地方1回ずつ)。
(3カ月前) HP作成開始	実験書の配布をHPで行うことを決定し、HP作成着手。
(4カ月前~現在) 広報活動	SNSを利用し、広報活動を行う。首都や地方の教育関係施設に赴き、セミナーなどを開催してHP開設の告知を行う。
(今後) 広報、HPの発展	実験書の数を増やし、継続的に広報活動を行う。他教科も掲載していく。

現地教員が共有できる学習指導案を。 理科実験書を掲載したウェブサイトを開設

Mongolia

文 = 箭木慎太郎さん(モンゴル・理科教育・2017年度1次隊)、
福島未希さん(モンゴル・理科教育・2017年度2次隊)



ウェブサイトに掲載した理科実験書(酸化と還元)

モンゴルの教員向けのウェブサイト(以下、HP)がようやく完成しました。これまで来るのにおよそ1年半。とても感慨深く、嬉しく感じています。

私たちはそれぞれ地方の教育局に所属し、学校を巡回しながら活動しています。お互い初代の協力隊員だったこともあり、半年は活動の指針が決まらねず、悩みながら活動をしていました。そんな中、1冊の実験書を発見します。それは過去の理科教育隊員が約40種類の実験をまとめたものでした。その実験書を活動先の教員たちに紹介すると、実践的で使用しやすかったため誰もが欲しがりました。そこで、私たちは新たな実験書の作成を開始しました。

実は過去の実験書は、約10年前にモンゴル全土に製本したものが配布されていたにもかかわらず、全く普及していませんでした。10年経った現在、同じ隊員の私たちがモンゴル人に情報が共有されていないという現実にもショックを受けました。本という形で残してもその存在はすぐに忘れられてしまふ……モンゴルの教育に関する問題点は「情報を共有することの難しさ」にあったのです。また、情報は協働として何代にもわたって継続的に発信し続けられるものでないといけないと感じました。そこで、モンゴルではインターネットが普及している、作成にお金がかからない、最新の情報が載せられるという理由で、実験書の配布方法は「HP」を選択しました。ほかにも、教育関係の隊員で組織する教育分科会で過去の資料を共有し、JICA事務所でも管理してもらえるよう依頼しました。

しかし、本当に大変なのはここからでした。言い回し、誤字のチェックなど実験書の作成には同僚の助けが不可欠で、慣れないモンゴル語で悪戦苦闘。HP作成をこれから学び、今後の隊員のためのマニュアルを作成するのは想像以上に大変で、投げ出しなくなる時もありましたが、同僚、教育関係の隊員に支えられ、助けられました。

そして、HPが完成し、SNSやセミナーを使って宣伝したところ、SNSでのシェアが100件を超すなど大きな反響があり、改めて自分たちがやってきたことは間違っていなかったと確信が持てました。今後は理科だけでなく他教科の教案も増やす予定なので、引き続きSNSやセミナーで宣伝をし、HPの普及を行っていくつもりです。また、このHPのリンク先をモンゴル教育省のHPに載せていただく方向で調整しています。このHPがモンゴルの教員、特に首都との格差が大きい地方の教員たちの役に立つことを期待しています。

※モンゴルの教員向けHP ▶ <https://mongoledbagsh.wixsite.com/mysite-1>



佐藤 翔さん

Profile

1993年生まれ。大阪府出身。大学卒業後の2016年7月、協力隊員としてカメルーンに赴任。18年6月に帰国。その後、自身の協力隊経験を綴ったエッセイ『ぼんじゅーる、カメルーン』（デザインエッグ社）を自費出版。現在は、バイオトイレの海外普及に取り組む(株)TMT.Japanの社員としてカメルーンに駐在。

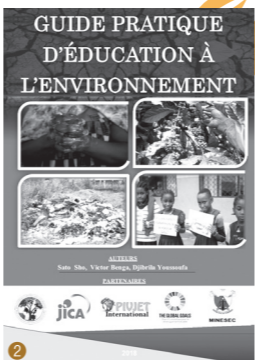
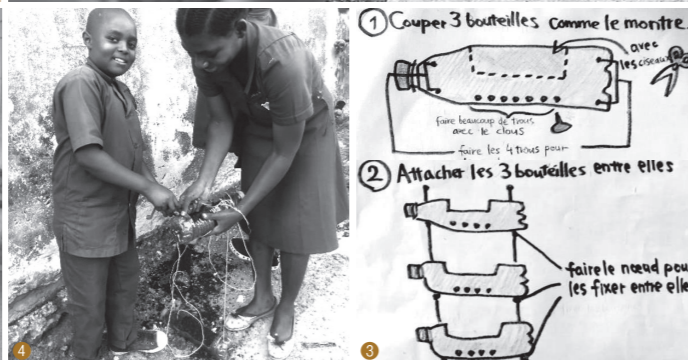
活動の概要

NGO「ニーナ・ギアネッティ」がニヨン・ソー県ンバルマヨ市で運営する中学校に配属され、主に以下の活動に従事。
●環境教育授業の実施（チームティーチング）
●環境教育マニュアルの作成
●環境関連イベントの実施（現地の環境NGOとの協働）

事例のポイント

相手の負担が少ない方法を探る！
現地教員に環境教育授業を行ってもらう場合、配慮が必要なのは彼らの負担増だ。「担当教科以外に環境教育授業を行う」という「足し算」が難しくれば、「担当教科の授業に環境教育を組み込む」という「引き算」もある。

- ①色を付けたピンの王冠で学校名のモザイク看板をつくる生徒たち。佐藤さんが授業に取り入れたアクティビティのひとつだ
- ②佐藤さんが作成した環境教育マニュアルの表紙。カメルーンの他の環境教育隊員が実践したアクティビティも載せている
- ③環境教育マニュアルのページ例。ペットボトルをリユースして植木鉢をつくるアクティビティの手順を紹介している
- ④⑤のアクティビティを佐藤さんが授業で実践したときの様子
- ⑥自作の紙芝居『川を汚したのは誰だ?』を使い、水の汚染について考える授業を行う佐藤さん



の前任隊員とつながりのあった彼らが、小学校で行う手洗い啓発のイベントに誘ってくれたのがきっかけだった。以来、ラジオを使った啓発や、ゴミ拾いイベントの実施など、地域住民を対象とした環境教育活動をたびたび彼らとともに実施。マニュアル作成について相談したときも、「ニーズは高いと思う」と協力を快諾。フランス語のチェックなどをしてくれた。「ニーズは高い」という言葉の意味を、佐藤さんは後日、改めて実感することになった。佐藤さんの帰国が迫っていると知った活動先の教員たちから、「いつか環境教育の授業をする余裕ができるかもしれない。今まであなたがやったアクティビティのマニュアルはないのか?」と質問を受けることがしばしばあったのだ。

マニュアルの完成は帰国の間際。活動先など関係機関に配布したところで、佐藤さんの任期は満了を迎えた。その後、マニュアルの活用を促す目的のイベントを、製作に協力してくれたNGOが企画・実施するようになったという。



環境教育マニュアルの作成

佐藤さんが授業実践以外で力を入れた活動のひとつが、現地教員向けの環境教育マニュアルの作成だ。着手したのは、任期も残り1年をすぎたころ。カメルーンには佐藤さんと同じ時期に複数の環境教育隊員が派遣されていたことから、それぞれが授業で実践しているアクティビティをまとめ、簡単に共有できるようにしようとの意図だった。ペットボトルやピンの王冠を使った工作など、佐藤さんが実践し、現地教員にも真似が容易なアクティビティも、手順をまとめれば一冊の本になるほどの量になっていた。

マニユアルの完成は帰国の間際。活動先など関係機関に配布したところで、佐藤さんの任期は満了を迎えた。その後、マニュアルの活用を促す目的のイベントを、製作に協力してくれたNGOが企画・実施するようになったという。

環境教育分野の活動ポイント

特集1

環境啓発の対象者から、「ゴミのポイ捨てをやめる」といった「行動変容」を引き出すことは、かならずしも容易ではない。染み付いた「習慣」の堅さが立ちをはかるからだ。本特集では、さまざまなタイプの環境啓発の活動事例を取り上げ、そこから「行動変容」を引き出すためのヒントを探る。

現地教員とのチームティーチングで環境教育授業の方法を伝達

学校での啓発活動
佐藤 翔さん（カメルーン・環境教育・2016年度1次隊）の事例

小・中学校で環境教育の授業を担当した佐藤さん。当初は「多忙」を理由に現地教員の関与が得られなかったが、任期が後半に入ると、彼らとのチームティーチングが実現していった。

チームティーチングでの授業を実現することができた。佐藤さんとチームティーチングをした教員のなかには、後に単独で環境教育の授業を行うようになってくれた人もいた。

新規の活動校を得た時期、最初の活動校でも状況に変化が訪れた。プライベートル・エティエンヌさんに、まだチームティーチングの実現をあきらめていないことを吐露。すると、「理科の授業の中に、環境に関連のある単元があれば、その授業の一部を環境教育に充てるというのはどうか」と提案してくれたのだった。エバルさんから渡された理科の教科書を見ると、「水」や「空気」など、環境保全に関する啓発と結びつけやすいテーマの単元が見つかる。そうして、「エバルさんの理科の授業に佐藤さんが入る」という形でチームティーチングがスタートした。

エバルさんとの協働はさらにほかの教員へも波及。職員室で佐藤さんとエバルさんがチームティーチングの打ち合わせをする様子を見た教員が興味を持ち、自分の授業にも環境教育を組み込んで構わ

他教科の授業の一部を環境教育に

チームティーチングの件で状況が好転し始めたのは、着任して1年が過ぎたころだった。

そのひとつは、新たな活動校の獲得だ。佐藤さんの受入機関であるカメルーン中等教育省の担当者と話をする機会があり、その席でチームティーチングのパートナー探しを難航していると相談。すると、新たに公立の小・中学校教員を活動場所とさせてもらえることになったのだった。新規の活動校で佐藤さんは、環境教育に意欲的な教員たちと巡り会い、ようやく

対して、生徒たちは積極的に取り組んでくれる。その姿を見るにつれ、「環境教育の授業を絶やさないためにも、教員たちに指導できるようにもなってもらわなければ」との思いは募っていく。そこで佐藤さんは、チームティーチングのパートナー探しも諦めずに継続。しかし、アクティビティの具体的な例を提示して教員たちの興味を引こうと努めるものの、「多忙」を理由に断られてしまうことが続いた。

そうしてまずは単独で授業を行うこととなったが、直面したのは語学力の壁だ。当初は授業で使うフランス語の力が未熟だったため、「講義」をするのが難しかった。そこで取った対策は、アクティビティが中心の授業にすること。扱うテーマを「3R」に定め、関連するアクティビティの情報収集に奔走する。なかでも有益だった情報源は、SNSを使った他国の環境教育隊員とのやりとりだった。

CASE 1

*3R…「Reduce(発生抑制)」「Reuse(再使用)」「Recycle(再生利用)」の優先順位でゴミの削減に努めるべきとの考えを示す言葉。



- 1 図書館に児童を集めて環境教育を行った川島さん。トイレットペーパーの芯をリユースしてサンタクロースの人形を作成した
- 2 川島さんが作成したポイ捨て防止の看板
- 3 同僚たちによってつくられたマリールールとマツバオタンの花壇
- 4 花壇づくりに取り組む同僚たち



CASE2

地域での啓発活動

かわしまたくみ
川島琢史さん（フィジー・環境教育・2016年度2次隊）の事例

サイクロンで荒れた景観の回復と ゴミのポイ捨て防止を狙って 道端に「花壇」を設置

町役場に配属され、住民を対象にゴミに関する啓発に取り組んだ川島さん。それまで町になかった「花壇」を道端につくる活動を始めたところ、配属先の事業と位置付けられるまでになった。

川島さんが配属されたのは、人口約5000人という小さな町の役場。町で出るゴミは役場が収集と埋立処分を行っていたが、そのコストの削減が課題となっていた。川島さんに求められていたのは、ゴミの減量化を目的に、住民に対してゴミに関する啓発を行うことだった。

「環境問題は二の次」という状況

着任当時、町内の道端には住民がポイ捨てしたゴミが溢れていた。フィジーには、市街地でゴミのポイ捨てをすると約2000円の罰金が課せられる法律があり、配属先には取り締まりを担当する職員も配置されていた。しかし、その効果は「焼け石に水」だったのだ。そうしたなかで川島さんが最初に着手したのは、ポイ捨ての撲滅に向けた啓発活動だった。「ステッカー」による啓発を配属先に提案したのは、着任してから2カ月ほど経った時期。「ポイ捨てをやめて、町をきれいに保とう」というスローガンを記載したステッカーを作成し、路線バスの車内や商店街に貼らせてもらった。しかし、ポイ捨ての減少にはつながらなかった。

そこで次にとった手は、「看板」を町の中心部に掲げることだ。作成した看板のサイズは3メートル四方。ペットボトルやビン、ビニール袋など、ポイ捨てされたゴミに含まれる各種素材について、それぞれが分解されるまでの年月を表で示した。しかし、当初は看板の前に立ち止まり、物珍しげに眺める人はいたものの、やはりポイ捨ての習慣は堅固であり、なかなかなる気配はなかった。

配属先には20人ほどの職員がいたが、まうため、その後は、親株から切り取った茎や枝を土に挿して繁殖させる「挿し芽」を試行する。ジニアや日々草、プルメリアなどが挿し芽に適していることがわかったことから、それらを中心に道端の花壇を広げていった。

毎日、黙々と作業に打ち込む川島さんの姿は、やがて同僚たちの心を動かした。川島さんは当初、一株一株の周りに大きい石を並べることで、「花壇」の体裁をつくり出していた。ところがある日、それらの石が、カラフルに塗られた古タイヤに置き換えられていた。「花壇」であることがよりわかりやすくなるだろうと考えた同僚たちの手によるものだった。

配属先が花壇づくりを同僚たちの「業務」と位置付けてくれるまでになったのは、川島さんが道端への苗の定植を始めてから3カ月ほど経ったころだった。そして、石とコンクリートを使った本格的な花壇づくりがスタートする。同僚たちは以前から挿し芽の方法は心得ており、川島さんの関与なしにみるみる花壇は拡大。帰国時には、町の景観が着任時とは

環境に関する業務に携わっていたのは、ポイ捨ての取り締まりを担当していた前述の職員のみ。彼を含め、同僚たちはそれぞれの業務で多忙な様子だったため、ステッカーや看板の活動は川島さんがほぼ単独で進めるしかなかった。そうしたなかでも、同僚たちと協働するチャンスを探り続けた川島さんだったが、任期も折り返しを迎える時期になって、町長からこう告げられてしまった。「実は今、『環境問題』は二の次にせざるを得ない状況なのです」。川島さんの着任の8カ月前、任地は超大型のサイクロンに襲われていた。その際に壊れた施設の修復などで、役場は手一杯の状態が続いていたのだ。

もはや自分の存在自体が配属先の邪魔になってしまっているのではないかと、行き詰まりを感じた川島さんだったが、ほどなくしてひとつの打開策を見つけた。「道端に花壇をつくる」というものだ。サイクロンで家や木々が倒され、町の景観は寂しいものになっていた。また、町には「花壇」という文化がなかった。そうしたなかで道端に花壇を設ければ、景観が回復するとともに、「この美しさを保とう」という気持ちで住民たちのゴミのポイ捨ての抑止にもつながると考えたのだった。

予想外の反響だった花壇づくり

川島さんはまず、配属先の一角を使って、マリールールやヒマワリなど国内で入手できた花の種から苗を育てた。ポットとしたのは、トイレットペーパーの芯だ。苗が育つと、道端に定植。しかし、種から育てる方法では時間がかかってし

すっかり変わったものになっていた。また、花壇づくりは川島さんと住民たちとの関係にも変化をもたらした。人目に付く場所での作業だったことから、「花壇をつくっている人」と認知されるようになり、住民から「いつも花を植えてくれてありがとう」と声を掛けられるようになる。なかには、「自分の家の庭にも植えたいから、挿し芽をするための枝を持っていい？」と尋ねてくる人もいた。

しかし、「ゴミのポイ捨てをなくす」という狙いは、簡単には達成できなかった。花壇にゴミが投げ入れられてしまうこともあったのだ。それどころか、株が抜き取られたり、花の部分だけがもぎ取られたりすることもあった。そうしたことが発生するたびに、同僚たちが川島さんを励ましてくれた。

帰国時に彼らがくれた饒別言葉は、「花壇のことは私たちに任せて」。サイクロンの被害からの復興はまだ途上にあっただが、それがひと段落した暁には、花壇をステッパに彼らが環境啓発の歩を進めてくれることが、川島さんの期待だ。



川島琢史さん

Profile

1982年生まれ、静岡県出身。静岡県内の医薬品メーカーを退職し、2016年9月、協力隊員としてフィジーに赴任。18年9月に帰国。現在は京都市内の企業に勤務。

活動の概要

- ラキラキ町（ビチレブ島）の町役場に配属され、主に以下の活動に従事。
- ゴミのポイ捨て防止を目的としたステッカーや看板の作成
 - 道端への花壇の設置

事例のポイント

プラスαのメリットを考える！
環境問題は、「目の利益に結びつかない」などの理由で解決が後回しにされてしまいがち。そんななか、本事例の「花壇づくり」のように、「プラスαのメリット」がある取り組みならば、現地の人の賛同を引き出しやすいかもしれない。



中村俊一さん

Profile

1989年生まれ、群馬県出身。東海大学農学部応用植物科学科卒。「群馬県立くまび昆虫の森」の里山ガイド・昆虫飼育員、「郡上八幡自然園」の自然体験指導者、「尾瀬国立公園・山ノ鼻ビジターセンター」の管理員を経て、2016年10月、協力隊員としてペルーに赴任。18年10月に帰国。

活動の概要

パラカス国立自然保護区（イカ州）の管理を行う国家自然保護区管理事務局パラカス事務所に配属され、主に以下の活動に従事。

- 野生生物の調査（海鳥や昆虫など）
- 学校での環境教育授業の実施
- 地域や学校での環境教育イベントの開催（人形劇の上演、ビデオの上映、折り紙教室など）
- ビジターセンターの業務支援（訪問者の案内、環境教育パネルの作成、環境教育ワークショップや写真コンテストの開催など）

事例のポイント

実施者も楽しめる環境教育を！
同僚たちが撮影した自然保護区の写真でコンテストを開いた本事例。同僚たちにも、「より素敵な写真を撮ろう」と熱が入った。このように、実施者側も楽しめる環境教育ならば、継続される可能性も高いだろう。

「自然」に対する関心の度合いは、人それぞれだ。中村さんが任期を通して心がけていたのは、とにかく多くの人の「怒」を叩いてみることに。そうして窓から顔を出し、中村さんの活動の意図を理解しようとしてくれた同僚や住民、観光客たちだが、今後、保護区の自然を支え続けてくれることが中村さんの願いだ。



1



3



4



2

- 1 ビジターセンターの訪問者に、自作の環境教育教材「地球の箱」を使ったアクティビティを提供する中村さん
- 2 小学校で実施した環境教育の授業で「海中の情景を描いた巨大パズル」に取り組む児童
- 3 ビジターセンターに展示した写真コンテストの応募作品
- 4 保護区を訪れた観光客の子どもたちを相手に中村さんが行った環境教育。サイコロを振り、出た目に書いてある環境問題に関するクイズに答えるアクティビティだ

誇りが生まれる。

自然保護官や、彼らの仕事を手伝うボランティアたちに出品を募ったところ、集まったのは50枚ほどの写真。ツアーでは見つけることが難しい野生生物のクローズアップなど、力作ぞろいだ。審査員は配属先の幹部。金賞・銀賞・銅賞のほか、「最も情熱的な写真」などいくつかのテーマで特別賞も選んでもらった。

応募作品は、ビジターセンター内に展示。すると、すぐに反応が現れた。それまで、ツアーの客は駆け足にセンターを後にするのが常だったが、展示した写真の前でガイドが足を止め、写真を使いながら保護区の自然について説明する姿が見られるようになったのだ。

*1 ダイナマイト漁…ダイナマイトなどの衝撃波で魚を殺したり気絶させたりし、回収する漁法

*2 LAB to CLASS…<https://lab2c.net>

中村さんが配属されたのは、パラカス国立自然保護区の管理を行う国家自然保護区管理事務局パラカス事務所。東京都の1・5倍ほどの広さを持つ同保護区は、7割近くを海が占める。アザラシやペリカン、ペンギン、海鳥など多様な野生生物の生息地となっており、その生態を観察するツアーが人気で国内有数の観光スポットとなっている。

貴重な資源である保護区の生態系を脅かすのは、住民や観光客が投棄するゴミ。また、違法なダイナマイト漁によってウミガメなどの貴重な生物が傷つけられてしまおうといったことも多発していた。そうした問題への対策として、配属先には生物学などの専門性を持つ「自然保護官」が数人置かれ、地元の住民や漁師、観光客を対象に環境教育を行っていた。中村さんに求められていたのは、自然保護官たちとともに環境教育を行い、その充実化を図ることだ。

「未来の漁師」たちへの環境教育

着任早々、ダイナマイト漁に関する調査を進めていくと、隣の漁師たちの仕事であることがわかった。彼らは漁を終えるとすぐに保護区を去ってしまうため、啓発を行うチャンスを見つづけるのが難しかった。そうしたなか、自然保護官であるカウンターパート（以下、CP）が妙案を思いついたのは、中村さんが着任してから半年ほど経ったころ。「漁師の子どもたちが通う学校で環境教育を行う」という案だ。漁師の子どもたちは将来、高い確率で漁師の道を選ぶ。そこで、先回

りして彼らに啓発を行おうと考えたのだ。学校で学んだことを、子どもたちが家で親に伝えてくれることも期待できた。

授業は中村さんとCPの二人三脚。中村さんがスライド資料をつくり、CPがそれを使って講義を行うという分担でスタートさせた。講義のテーマは「海洋の生態系」や「パラカス国立保護区」など。テーマや講義の内容はCPが考えたが、やがて中村さんの提案で「アクティビティ」も積極的に取り入れるようになった。アクティビティの考案で参考にしたのは、「海洋学習」の教材を紹介・提供するウェブサイトに「LAB to CLASS」だ。子どもたちに特に好評だったアクティビティは、「海中の情景を描いた巨大パズル」など。楽しみながら学べる授業は好評となり、小学校4校でそれぞれ月に1度ずつ授業を行うことが定着していった。

保護区内に設置されたビジターセンターも、中村さんが環境教育を行う場となった。対象は訪れた観光客。さまざまな教材を自作し、アクティビティを楽しんでもらった。短時間のアクティビティでありながら観光客の反応が良かったのは、「地球の箱」というオリジナルのものだ。用意する教材は、表面に「地球」を描いた2つの箱。ひとつは「きれいな地球」で、「笑顔」が貼ってあり、もう一方は「汚い地球」で、「泣き顔」とゴミが貼ってある。いずれの箱にも、コック付きのタンクを格納。中身は、前者の箱がきれいな水で、後者の箱が濁った水。観光客に行ってもらうのは、コックをひねってコップに水を汲んでもらうことだ。「地球が汚れば、

CASE 3

自然保護区での啓発活動

なかむらしゅんいち
中村俊一さん（ペルー・環境教育・2016年度2次隊）の事例

自然保護官が撮影した
自然保護区の写真で
コンテストを開催

自然保護区を管理する機関に配属された中村さん。ビジターセンターや地域の学校で自然保護に関する啓発に取り組んだが、「新しい風」として配属先に好評だった活動は、同僚たちが撮影した自然保護区の写真のコンテストだった。

飲む水も汚れてしまおう」ということを感じてもらおう趣旨のアクティビティである。小学生にも意味が理解できるものであり、地元の小学校の教員から教材の貸し出しを求められ、さらにそれを見守る子どもたちが借りて家に持ち帰るほどの反響だった。

同僚たちが保護区の魅力を切り取る「見てごらん、きれいだらう」。自然保護官の同僚がそう言って、スマートフォンで撮影した保護区の写真をうれしそうに見せてくれたのは、任期の半ばごろ。外

部の人の立ち入りを禁止している区域の風景写真だった。配属先の者だからこそ切り取れる保護区の姿がある——。そのことに気づいた中村さんは、新たな啓発の方法を思いつく。同僚たちが撮った保護区の写真のコンテストを開くというのだ。この取り組みには、次のような効果が期待できた。

■ 観光客が、ツアーでは見ることのできない保護区の様子を知ることができ、保護区内の自然保護に対する地元住民の意識が高まる。

■ 同僚たちに、自分たちの使命に対する

「行動が変わった」という手応えが得られません

学校での啓発に取り組み
環境教育隊員より

イベントや巡回授業など、試行錯誤しながら環境教育をやってきました。しかし、「みんなの行動が変わった！」という手応えをなかなか得ることができません。ゴミの啓発活動の直後にゴミをポイ捨てして帰る参加者を見るのはまだしも、環境担当者自身がポイ捨てしている場面もしばしばです。相変わらず汚い街の様子に直面するたびに途方にくれます。啓発活動することに意味はあるのだろうか…と、自分がやっていることの価値がわからなくなってきました。



同僚たちに活動への関心を持ってもらえません

地域での啓発に取り組み
環境教育隊員より

配属先は私の活動に関心がありません。同僚たちはそれぞれの仕事で忙しそう、私の世話をしている余裕はないこともわかるので、遠慮してしまいます。どう活動をすすめていいのか、ひとりで悶々としています。



「知る」と「行動する」の間にはものすごく大きなギャップがあります。「大量消費はいけない」「プラスチックはゴミの元凶」「食物の大量廃棄はもったいない」「こんなに安価なおかしい！」ということはおわかってはいるのに、100円ショップやコンビニを愛用してしまう自らの行動にもつながり、他人事とは思えません。

でも、啓発活動がなかったらどうなるのでしょうか。日々の暮らしの中に潜む私たち自身の行動の意味が誰からも知らされないとしたら……おそらく協力隊にかかわる人たちは、どこかで社会の課題を知る機会を持ち、その改善に向けて自分のできることは何かと一歩踏み出したのだと思います。啓発活動がその一歩を後押しする可能性を信じたい。

成果が見えにくい中で、「なんで変わらんんだろ」「やっていて意味があるのだろうか」と自分に問いかけて発する「問い」が、自分の力を弱めてしまうことも多いと感じます。そんな問いが頭をもたげたら、「今できることは何だろう」「どうやってこの状況を少しましにできるだろう」「どうやってこの状況を楽しくできるだろう」と、自分に向けての問いを可能性に向かう問いに切りかえていくのも大切なスキルだと思います。人は問われたものを見つけないといけません。問い方によって見えてくる風景は

かわります。

2015年にスタートしたSDGsのアジェンダは「我々の世界を変革する」というタイトルです。中に「我々は地球を救う機会をもつ最後の世代になるかもしれない」という一文があります。地球は私たちがどうであっても続くでしょう。でもこの美しさや豊かさをこれから先の世代に引き継いでいけるか否か、今、この世代の人類がキーストーンを握っていることは間違いないです。

野山の木々が数十万、数百万の種を散布し、太陽のエネルギーをもらい、ほんの一握りが芽吹く。時には、大木が倒れ、その場所に光があたり、今まで眠っていた種が一斉に芽吹き出すこともある。協力隊の活動とそのイメージが重なります。人々が変わりだす、動き出す、そんな場所やタイミングがあちこちで生まれることを信じて、思いをもった人が種まきを怠らず、創意工夫をしながらエネルギーを注ぎ続けていくことしかないと思います。



協力隊技術顧問が回答 活動Q&A集

JICA海外協力隊への技術支援を目的に、分野ごとに配置されている技術顧問。派遣中隊員から寄せられた活動に関する相談と、それに対する技術顧問による回答の例をご紹介します。

回答者
みよしなおこ
三好直子さん

- JICA海外協力隊技術顧問 (担当分野: 環境教育)
- (公社) 日本シェアリングネイチャー協会専務理事、海洋教育教材「LAB to CLASS」運営委員



いようです。

自分の趣味にプラスαの啓発要素を加えてやってみる例もいろいろ。マラソンの好きな隊員が、マラソン大会のときにトンぐと袋を持ってゴミを拾いながら走ったとか、サッカー好きな隊員が試合の後にゴミ拾いをしたとか。自分のやりやすいところから。

「自分のやっていること、やりたことの見える化」で効果をあげた隊員もいます。写真をメインに、文字は少なめにした活動レポートを、直属の上司だけに送るのでなく、少し拡げてちゃっかりメールのCCでほかの人にも送ることで、配属先の人たちが声をかけてくれるようになったと。写真にちょっとコメントを加えるくらいならば、

初期のころからでもできるのでは。日本での活動の紹介などから始めてもいいように思います。

「もう一度活動スタート時に戻ってやり直せるとしたら、初期に何をしますか?」という質問を、活動のうまいくっている先輩隊員に質問してみるのもいいですね。さまざまな知見は先輩隊員が持っています。

CPとの関係づくりは大事ですが、そこばかりにこだわり、誰もかまってくれない事務所までひたすらパソコンで調べものをする、他隊員のFBをチェックして焦ってしまう……言葉が不自由な中、ついつい陥ってしまう行動パターンです。人と人とのやりとりの中で語学力も上がり、可能性の芽が育ちます。こもりたくなるけど、一歩外へ出て、生の人、生の情報に触れていきましょう。もちろん外での活動は、CPが関心を示さなくても「ほっれんそう(報告・連絡・相談)」を忘れないでください。配慮を忘れると「外で勝手にやっている人」になってしまうので。

人間関係

改善策



CASE 1

性格や価値観の不一致「日本人」や「協力隊員」への無理解……。こうしたさまざまな理由により、上司や同僚など、活動で密にかかわらなければならぬ現地の人たちとのコミュニケーションや協働が難しいケースも少なくないだろう。そうした状況にどう対処すべきか、事例を通してポイントを整理する。

上司との人間関係

さいとうななみ
齋藤七海さんの事例
(ベナン・小学校教育・2016年度1次隊)

齋藤さん基礎情報

PROFILE

1993年生まれ、神奈川県出身。明治学院大学で小学校教諭と特別支援学校教諭の免許状を取得した後、2016年6月、協力隊員としてベナンに赴任。18年2月に帰国。

活動概要

ウエメ県アジOWN市の視学官事務所に配属され、小学校教育に関する主に以下の活動に従事。
● 図工授業の支援(紙とはさみだけでできる工作活動の紹介、自画像の描き方の指導、教員を対象とした指導法の研修会の開催など)
● 算数授業の支援(「九九ビンゴ」や「図形遊び」の紹介など)

秘めていた不満を 上司に伝えたところ 関係が一気に好転

教育行政機関に配属され、算数と図工の授業の質向上に向けた支援に取り組んだ齋藤さん。協力隊員を「秘書」のように扱おうとする上司に対し、時機を見て心の内を伝えたところ、関係が一気に好転した。

人事異動で上司が交替

ウエメ県アジOWN市の教育行政を所管するアジOWN視学官事務所に配属された齋藤さん。重点を置いた活動は、算数と図工の授業の質向上に向けた支援だ。配属先が管轄する小学校74校のうち、任期中に巡回したのは約50校。現地教員の授業に入り、新たな授業方法の提案を行っていた。

配属先の中で、各校の教員への指導を担当するのは「指導主事」というポスト。本来はそこに就く人が齋藤さんのカウンターパートになるのが筋だったが、着任時は空席となっていた。そのため、齋藤さんは当初から単独で各

校で実施することとなった。状況が急転したのは、研修会開催の準備を始めた矢先のことだった。配属先で急な人事異動があり、視学官長が交替。新任の視学官長(以下、Aさん)に研修会の計画を伝えると、こう告げてきたのだ。「あなたは学校を建て直す費用を出してくれるわけではないのか? あなたの存在意義はそこにしかないのだと思うのだけれど」。結局、研修会の開催自体は認めてもらえたものの、その意義を認める言葉がAさんの口から出ることはなかった。

そうして齋藤さんは、Aさんとコミュニケーションを取ろうとする気力を次第に失っていく。それに拍車をかけたのは、齋藤さんを「秘書」のように扱おうとするAさんの態度だった。「私の靴を持ってきなさい」「この書類のコピーをとりなさい」……。日々、アゴで使おうとするのだった。しかし齋藤さんは、「仕方がない」とあきらめ、反発せずにいた。Aさんは各校の校長

に対して同じような態度をとっていたので、このような「上下関係」のあり方は、ベナンでは「普通」なのだと思っただけだ。また、Aさんとの関係が崩れ、活動がやりにくくなってしまったことへの恐れもあった。

雨降って、地固まる

ベナンの人々の性格に対する理解がより進むと、齋藤さんはこう確信するようになった。Aさんが下の人間に対してとる高圧的な態度は、ベナ

ンで「普通」なわけではない。そうしてある日、齋藤さんは心のモヤモヤをAさんに直接ぶつけるに至る。任期も半ばを過ぎたころだ。

出張に行くAさんが、いつもの口調で「運転手呼びなさい」と指示してきた。齋藤さんが「私は彼の携帯番号を知りません」と言うと、「どうして知らないのか」と責めてきた。そこで齋藤さんは、覚悟を決めてこう吐き出した。

「そうやって、あなたはいつも『靴を持ってきなさい』などと要求します。けれども、それは本当に失礼なことだと思います。私はあなたのアシスタントを務めるためにここに来たわけではありません。ベナンの子どもたちのために来たのです。残りの任期も、私はベナンの先生たちと協力しながら、教育をより良いものにするためにできる限りのことをしたいと思っています。だから、そういう態度をされるのはとても嫌なのです」

その時期、まだフランス語の苦手意識が残っていた。しかし、巡回先の学校では教員たちと率直に意見をぶつけ合う経験を重ねてきており、このときも言葉はすらすらと出てきた。

Aさんは驚いた表情を見せた。しかし、上司に歯向かってきたことを咎めたりはせず、反対に、次のような言葉で齋藤さんの心の内への理解を表現してくれたのだ。

「正直に言ってくれてありがとう。我慢させて悪かった。しかし、なぜもっと早く言ってくれなかったのか。国に

校を回らなければならなかった。

齋藤さんは配属先にとって2代目の巡回先では活動していなかった。しかも、任地は外国人が来ることがほとんどない地域。そのため、各校の教員との関係は当初、あたかも「着ぐるみ」に入った者どうしがコミュニケーションしているような感覚だった。互いに相手の「内面」が読めなかったのだ。

齋藤さんは彼らとの距離を縮めるため、世間話をしたり、一緒に食事をしたリするよう努めた。「どうしてあなたは眉間にシワを寄せて歩いているのか?」「日本人はなぜ洗濯機を使うのか?」「手で洗うこともできないのか?」など、いちいち説明するのが億劫に感じられるような質問もよく受けたが、「太陽が眩しいだけです」「日本には『冬』があるので、手洗いは大変なのです」などと答え、言葉のキャッチボールを粘り強く続けた。すると、次第に状況は変化。齋藤さんは彼らの間の性格の多様性が見えるようになってい、彼らも齋藤さんが自分たちと同じような喜怒哀楽を持つ人間なのだと思解してくれるようになっていった。

そうして関係が深まった教員たちの中には、齋藤さんが提案する新たな手法を自分の授業で積極的に実践してくれる人も現れてきた。そこで齋藤さんは、研修会を開き、そうした教員に模擬授業を行ってもらおうと計画。着任して半年ほど経ったころだ。配属先のトップである視学官長もその意義に賛同。市内の各小学校から代表教員を集

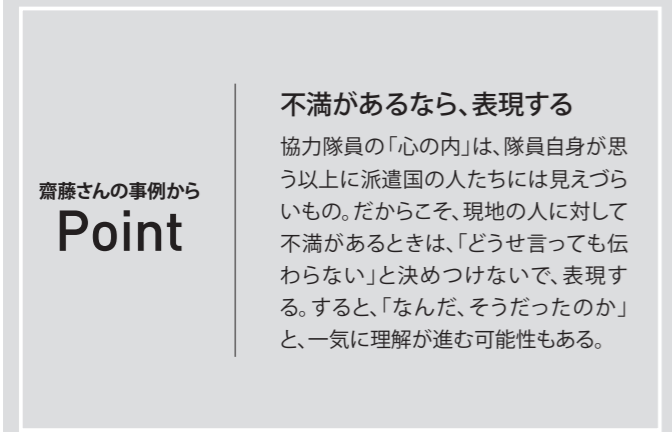
よって習慣が違うのは当たり前だ。ただ私はあなたの国の習慣がよくわかっていない。だから、これからは思っていることを正直に伝えてほしい」

Aさんはその翌日、早速齋藤さんに電話を掛けてきて、「今日、私はある学校に行く予定だ。一緒に来ないか。きみの意見ももらいたい」と誘ってくれた。以後、Aさんは齋藤さんの活動への最大の理解者のひとりとなり、学校現場への出張に齋藤さんを誘っては、「きみはあの学校をどう感じたかい?」と意見を尋ねてくれるようになった。任期の終盤には、Aさんの協力により、市内の教員に図工授業の方法を伝える2回目の研修会を実現させることもできたのだ。

不満があるなら、表現する

協力隊員の「心の内」は、隊員自身が思う以上に派遣国の人たちには見えづらいもの。だからこそ、現地の人に対して不満があるときは、「どうせ言っても伝わらない」と決めつけずに、表現する。すると、「なんだ、そうだったのか」と、一気に理解が進む可能性もある。

齋藤さんの事例から Point





1 地域の女性グループを対象に料理教室を開く木原さん(左)。この日はバザーでの販売も計画していた「ケーキ」を試作
2 国連機関の支援を受けて配属先が行う栄養改善プログラムに参加し、体重測定を手伝う木原さん(右)
3 木原さん(右)をフォローしてくれたAさんと

木原さんは、配属先を追い出されることになるだろうと覚悟していたが、結局、何の処分も下らなかった。そして

木原さんが派遣されたマチンガ病院は、病床数約300床の総合病院。配属されたのは、栄養失調の患者の治療を担当する部署だ。県内の農村部では、食料が底をついてしまう雨期の始めを中心に、多くの子どもが栄養失調になるという問題が存在していた。そうしたなか、木原さんは主に次のような活動に取り組んだ。

- 栄養失調児を配属先に連れて来た母親を対象とする栄養講習の実施
- 地域の女性グループやエイズ患者の支援グループを対象とした、栄養改善を目的とする料理教室の開催
- 病院食の食材を充実させることを目的とした院内菜園の整備
- 5S活動の推進

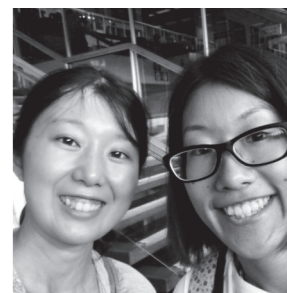
同僚たちの職業倫理

配属部署に所属していた同僚は十数人。その内訳は次のようになっていた。

- 栄養士(1人)
- ヘルス・サーベイランス・アシスタント(3人)：注射や簡単な傷の手当てなど、医療行為の一部を行う医療職
- ヘルス・ケア・ワーカー(約10人)：身体測定など医療行為に付随する業務を担当するスタッフ

同僚たちは木原さんを温かく迎え入れ、当初から食事にもよく誘ってくれた。しかし、こと仕事のことになると、協力的な姿勢を感じることができなかった。栄養講習や料理教室を一緒に開こうと提案しても、そうした活動の意義は認めてくれるものの、動こうとはしてくれないのだった。

そうした態度の最大の要因だと木原さんが考えたのは、「職業倫理」だ。患者がいるのにスマートフォンをいじったり、買い物にかけてしまったりするのは、同僚たちにとって「普通」のこと。そんななか、栄養講習や料理教室などで仕事が増えることを受け入れ



CASE 2

同僚との人間関係①

木原悠希さん(写真左)の事例
(マラウイ・栄養士・2016年度2次隊)

患者を大切にしないことへの怒りを表現したところ、味方となる同僚が出現

病院の栄養部門に配属された木原さん。同僚たちが患者をないがしろにしていることへの怒りを表に出したところ、同僚のひとりとその「本気」を受け止め、活動への協力者となってくれた。

- 木原さん基礎情報
- PROFILE
 - 1987年生まれ、福岡県出身。栄養士として病院や老人ホームに勤務した後、2016年10月に協力隊員としてマラウイに赴任。18年10月に帰国。
 - 活動概要
 - マチンガ県の県病院に配属され、主に以下の活動に従事。
 - 栄養失調児の母親への栄養講習の実施
 - 地域住民を対象とした料理教室の開催
 - 院内菜園の整備
 - 院内での5S活動の推進

「遠回しの嫌味」で同僚たちに揺さぶりをかけてみることもあった。たとえば、「テキパキと仕事を進めない同僚に対して、勇気を振り絞って」「身体測定は簡単な作業なのだけれど」と呟いてみる。しかし、それで彼女たちに何かが変わるといことはなかった。態度が変わらないばかりか、その後、何事もなかったかのように木原さんを食事に誘ってきたりするのだ。そうして木原さんは、次第に「嫌味」を言う気力すら失せていく。拒絶されないことで「居づらさ」を感じないでいられるのは救いだったが、自分の存在意義への疑念は膨らむ一方だった。

義憤の爆発が転機に

転機が訪れたのは、着任して1年ほど経ったころだ。ある日、木原さんの部署にそのスタッフがやってきて、

「この一件を境に木原さんへの態度が大きく変わったのはAさん。活動を努めてフォローしてくれるようになったのだ。たとえば、木原さんが子どもの身体測定の準備をひとりで行っていると、近くで怠けている同僚に「あなたたちもやりなさい」とお尻を叩いてくれた。あるいは、配属先で栄養講習を行う際には、木原さんのチェワ語に不適切な箇所があると、代わりに説明してくれた。Aさんのそうした姿勢は配属部署のほかの同僚たちにも影響。Aさんに倣って木原さんをフォローしてくれるようになったのだ。」

「本気」は誰かが受け止める

「ボランティア」という立場では、同僚たちとの関係が崩れるのを恐れ、どうしても本音を隠しがち。しかし、それでは自分のことを理解されないままになってしまう。「現地のために」という気持ちが「本気」ならば、本音をぶつけても、誰かが味方になってくれるはずだ。

木原さんの事例から Point



1 高次脳機能障害がある脳卒中患者にボールを使った作業療法を行う副島さん
2 Aさん（奥左）が主体となって同僚たちを対象に実施した高次脳機能障害に関する勉強会
3 評価用紙の使い方を実習生たちに説明する副島さん（左から2人目）



同僚との人間関係②

そえじまのぞみ
副島希望さんの事例
(ベトナム・作業療法士・2016年度2次隊)

同じ志を持つ同僚が「橋渡し役」となり、ほかの同僚たちとの関係が改善

病院の作業療法部門に配属された副島さん。部門の課題を上司に指摘したことで、同僚たちとの関係が悪化したが、付き合いを避けずに粘り続けたところ、任期半ばに状況が好転した。

副島さん基礎情報

- PROFILE
1983年生まれ、佐賀県出身。長崎大学医学部保健学科を卒業後、作業療法士として医療法人共和会小倉リハビリテーション病院の回復期病棟に約9年間勤務。退職後の2016年10月、協力隊員としてベトナムに赴任。18年10月に帰国。
- 活動概要
バックマイ病院(ハノイ市)の作業療法部門に配属され、主に以下の活動に従事。
●患者への作業療法の実施
●評価用紙の導入支援
●同僚への専門知識の共有

- *1 日常生活動作…食事や更衣などの生活で不可欠な基本的動作。
- *2 高次脳機能障害…脳卒中や交通事故などによって脳が損傷することで起こる障害。

国立病院の作業療法部門に配属された副島さん。ベトナムには理学療法士の国家資格はあるが、作業療法士は無い。副島さんの着任当時、作業療法部門には4人のスタッフが配置されていたが、いずれも作業療法に関しては何れも数カ月の研修を受けただけの理学療法士たちだった。

ベトナムの3大病院のひとつだったが、作業療法部門には課題も多かった。「日常生活動作」の訓練がなされておらず、手の機能訓練を繰り返すばかり。また、「高次脳機能障害」など重い障害がある患者への治療は、的外れなものになっていた。なかでも大きな課題だったのは、「患者の状態を評価し、治療法を再検討する」という作業療法の基本プロセスが欠落し、同じ治療法を闇雲に続けている点だ。そうしたなか、副島さんはみずから患者への作業療法を行うにつつ、同僚たちに専門知識を提供。彼らの手技の質が向上したほか、

作業療法部門のシステムに関しても次のような改善が実現した。

■「評価する習慣」の定着
「患者の状態を評価し、治療法を再検討する」というプロセスの徹底を促すため、副島さんは「評価用紙」の導入を支援。列挙した症状の有無にチェックを入れていくだけの簡易なものにしたところ、それを使って評価を行う習慣が定着した。

■「日常生活動作」の訓練の定着
副島さんの働きかけにより、日常生活動作のひとつである「更衣」の練習を、特定の曜日にならざるいうルールが導入された。

プライドを逆なでしてしまう

作業療法部門の同僚たちは、いずれも理学療法士としては10年を超えるキャリアを持っていて、各種研修を受けた経験も豊富であり、プライドもひと

きわ高かったため、当初、副島さんが作業療法に関するアドバイスをしても、聞く耳を持ってもらえなかった。しかも、日常生活動作の訓練や高次脳機能障害がある患者の訓練は、効果が現れるまでに時間がかかることから、副島さん自身の治療の効果によって技術力の高さを知ってもらうことも難しかった。

そんななか、副島さんは着任早々、彼らのプライドを本意に逆なでしてしまっただけで、上司に定期的に提出する活動レポートの中で、作業療法部門の同僚たちに見られた技術面の課題を指摘。それが彼らに知られるところとなってしまったのだ。この事情もよくわからないくせに、われわれに問題があるのだと上司に報告した。副島さんに対する同僚たちの反発がにわかに強まり、彼らとは仕事に関する話ができない状態となってしまった。「自分がここにいて意味はなくなってしまう

事以外での欠勤はしなかった。また、たとえ話を交わすことはなくても、治療室の同じ空間にいるようにした。昼食は同僚も副島さんも弁当だったが、やはりかならず同じ部屋で食べた。彼らとの関係が改善するきっかけが訪れたのは、着任して半年ほど経ったころだ。理学療法の研修を受けるため、副島さんの着任早々から職場を離れていた作業療法部門のリーダー役の男性（以下、Aさん）が、研修を終えて復帰してきた。活動レポートの一件の渦中にいなくなったAさんは、作業療法部門の改善に関する副島さんの意見に耳を傾けようとしてくれた。そうして彼とのコミュニケーションを重ねるうちに、彼自身がほかの同僚たちに対して不満を持っていることがわかってきた。作業療法部門の技術レベルを上げたいと思うものの、ほかの同僚たちがなかなか付いてきてくれないとのことだった。

Aさんによる「橋渡し」により、ほかの同僚たちも次第に「副島さんは正しいことを言っているらしい」と感じるようになっていく。そうしてようやく彼らの態度が変わり始めたのは、任期も後半に入ったころだ。副島さんと仕事に関する話をするのを厭わなくなったのだ。「関係を修復するチャンスがやってきた」と感じた副島さんは、

「た。そう悲観し、物陰で泣くこともあった。そんななかで副島さんの心の支えとなってくれたのは、配属先が受け入れていた医療職の実習生たちだ。彼らは素直に日本の作業療法に関心をもち、その詳細について副島さんに質問してきた。そうして副島さんに敬意を持つようになった彼女たちは、「あの人にあんなふう言われていたけれど、大丈夫？ 私もある人は苦手なの」と言っていて、励ましてくれるのだった。

橋渡し役が出現

同僚たちに耳を傾けてもらえない状況のなか、副島さんはひとつの方針を貫いた。「彼らとの接触は避けない」というものだ。いったん距離を置いてしまったら、それを縮めることがもはや不可能になってしまおうと考えたのだった。どんなに気が重くても、病気や用

自分の考えを伝えるだけでなく、彼らの意見にも耳を傾けるよう努めた。すると、「作業療法に関する医師の知識が足りない」など、彼らが立場上、口にはできない不満を抱えていることも見えてくる。副島さんは彼らとの関係を深めるため、そうした不満を代わりに病院側に伝える役目も担った。

やがて、彼らの仕事ぶりも変化。副島さんが行っている作業療法を見学し、そのやり方を真似るようになったのだ。また、それまで一向に聞き入れられなかった「治療の前に患者の状態を評価すべき」というアドバイスのについても、彼らはそれを受け入れ、実践。さらに自ら実習生に対してその大切さを説くまでになったのだった。

チャンスの到来まで粘る

ウマが合わない相手であっても、相互理解の望みを捨てたくないのなら、粘り強く接点を持ち続けることが重要だろう。いったん距離を置いてしまったら、そこからふたたび関係を修復するのは至難の技になってしまうからだ。

副島さんの事例から Point



1



3

- 1 石井さんが企画した3校合同のドッジボール大会。他隊員たちにも審判役などで協力してもらった
- 2 ドッジボール大会に向けた体育授業の中で、動画を使いながら日本のドッジボール大会の様子を紹介する石井さん
- 3 巡回先の体育教員とのコーヒータイム。ドッジボール大会の運営に協力的だった教員のひとりだ



活動相手との人間関係

石井麻夕さんの事例
(エチオピア・体育・2016年度2次隊)

職場の外での「コーヒータイム」で教員たちとの信頼関係を構築

小学校で体育授業の支援に取り組んだ石井さん。当初、「欲しいのはお金と物だけ」と口にしてきた教員たちだったが、「コーヒータイム」が彼らとの距離を縮めてくれた。

石井さん基礎情報

PROFILE
1977年生まれ、神奈川県出身。東海大学体育学部体育学科を卒業した後、スポーツクラブで体育・スポーツのコーチを務める。2016年10月、協力隊員としてエチオピアに赴任。18年10月に帰国した後、(株)運動会屋に入社。

活動概要
ティグライ州教育局のメケレ市教育事務所に配属され、小学校3校を対象に体育授業に関する主に以下の活動に従事。
● 体力測定の実施
● 授業のサポート
● 3校合同のドッジボール大会の開催

石井さんの配属先は、ティグライ州教育局のメケレ市教育事務所。同市の教育行政を所管する機関だ。求められていた活動は、配属先から指定された市内の小学校3校を巡回し、体育授業の質向上を支援することだった。巡回先では教科担任制がとられており、体育の授業を担当する教員が学年ごとに配置されていた。教員は実施した授業の報告書を学校に提出しなければならぬこととなっていたため、体育の授業は形としては行われていた。しかし、各校にあった道具はボールだけであり、どうしても「競技の歴史」などを教える「座学」の割合が多くなっていた。椅子に棒を渡して「ハードル」の指導をするなど、手に入る物で工夫を凝らしながら実技を行っている教員もいたが、大半の教員が行う実技は、児童にボールを与え、サッカーなどで遊ばせておくだけといったものになっていた。

「体力測定」をネタに関係づくり
石井さんは、巡回先の教員たちにとって初めて接する協力隊員。彼らは当初、あからさまにこんな趣旨のことを告げてきた。「私たちには知識も技術もある。外国人ボランティアから欲しいのはお金と物だけだ」。冒頭から授業の改善策を提案しようとしても、彼らに受け入れてもらうのは難しいだろう。そう感じた石井さんは、「教える・教えられる」という関係ではなく、「対等」の関係で共に何かに取り組みながら、彼らとの人間関係を築いていこうと考える。思いついたアイデアは、「体育の時間を使って、教員たちと共に『体力測定』を行う」というものだ。巡回先には体力測定を行う習慣がなかったため、そのやり方は石井さんが「教える」ことになるが、彼らの授業方法を否定するわけではないことから、受け入れてもらえる可能性

は高いと見込んだのだった。体育の時間を使った体力測定をスタートさせることができたのは、着任して3カ月ほど経ったころだ。見込みどおり、体育教員たちは共同での実施を受け入れてくれた。測定した項目は、短距離走や垂直跳びなど、日本の小学校で行われる体力測定で一般的なもの。毎授業、1項目ずつこなし、授業中、測定に取り組み児童たちの運動能力をネタに教員たちとコミュニケーションをとることもできたが、彼らとの距離を縮めるうえでより重要だったのは、授業の合間の「コーヒータイム」だった。コーヒーの生産が盛んなエチオピアでは、道端のカフェでコーヒーを飲みながらコミュニケーションをとることが、ひとつの文化となっている。巡回先の教員たちも、日中、コーヒーを飲むために何度も校外のカフェに足を運んでいた。「外国人ボランティア

ティグライ州教育局のメケレ市教育事務所に配属され、小学校3校を対象に体育授業に関する主に以下の活動に従事。
● 体力測定の実施
● 授業のサポート
● 3校合同のドッジボール大会の開催

そうして、彼らとの関係は、いわば「外国人ボランティアと受益者」から「人間と人間」へと変化する。当初、石井さんは「活動以外でこんなに時間を使っているのだろうか」と自問することもあったが、やがて「これも活動の一部だ」と確信するようになった。

ドッジボール大会の開催へ

体力測定に要した期間は約4カ月。その間に築いた教員たちとの人間関係は、以後の活動のベースとなった。教員たちが「欲しいのはお金と物だけだ」と口にするのはなくなり、彼らとともに通常の体育授業を行う活動がスタート。石井さんは彼らの実技の引き出しを増やすため、バスケットボールやポートボールなど既存の道具でできる種目の指導方法を紹介していった。ときに教員が授業を抜け出し、どこかに行ってしまうこともあったが、そんなときは、コーヒータイムで親しくなったほかの教科の教員が探しに行ってくれることもあった。

任期の半ば、石井さんは授業の新機軸を着想する。3校合同で大会を開くことを目標に、「ドッジボール」の指導を集中的に行うというアイデアだ。ドッジボールには、「ボール一つでできる」「団体競技である」「ほかの球技よりルールがシンプル」といった特徴があり、現地の体育授業に向いている種目だったが、それまで行われてはいなかった。ルールの説明から始め、投げ方の練

習、ゲームの実践へと段階を踏みながら進めていく授業プランを立てると、各校で体育教員を相手に、競技の概要や立てた授業プランを伝えるセミナーを実施。その後、彼らに授業を進めてもらい、石井さんはそのフォローに回った。この時期、コーヒータイムに体育教員たちと交わす話も、授業の進め方に関するものが多くなっていた。大会が実現したのは、帰国まで残り半年という時期。ドッジボールが現地の体育授業に根付く可能性を感じた石井さんは、その後、大会の模様を収めた動画をプレゼンテーション資料としながら、教員養成校の学生やほかの小学校の教員たちにもドッジボールを伝えていった。

関係づくりは「急がば回れ」

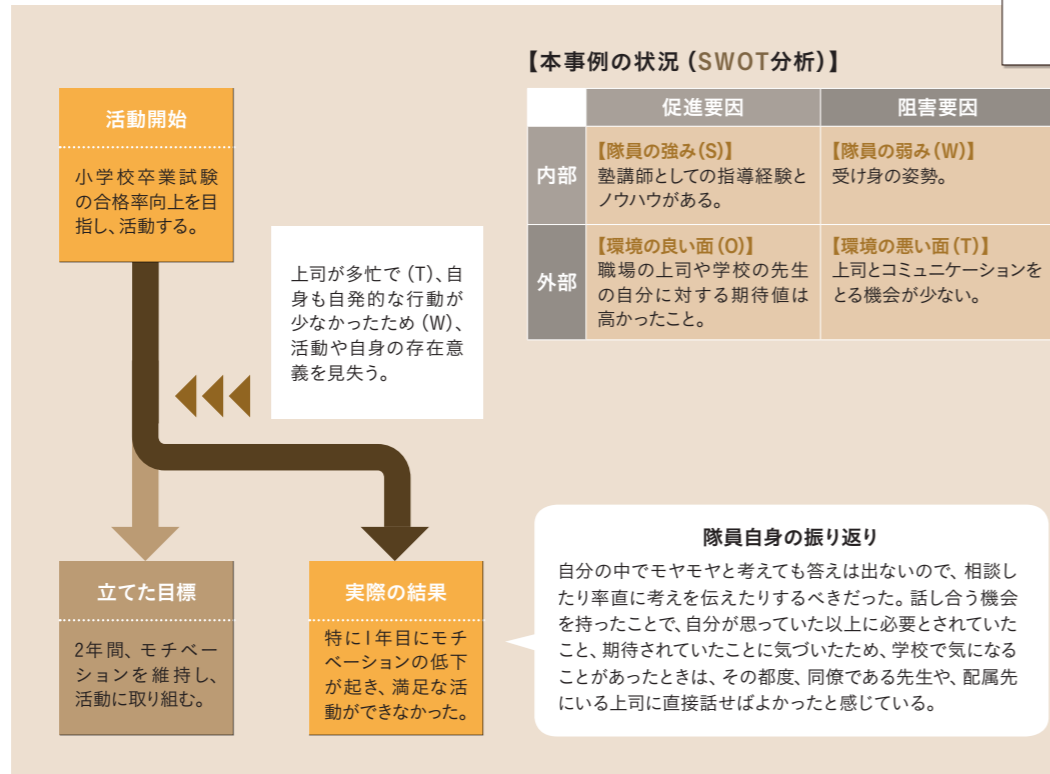
異文化社会の人たちと互いの内面を理解し合うには、時間がかかる。そのため、まずは活発にコミュニケーションをとることができる「きっかけ」や「場」を見つけ出すことが、重要な作業となってくるだろう。

石井さんの事例から Point

“失敗”から 学ぶ #170



事例整理



他隊員の分析

人とのつながりを大切に!

今回のケースは上司とのコミュニケーションをとる機会が少ないことも大きく影響したのではないかと思います。コミュニケーションをとる方法は直接伝える以外に、間接的な方法もあると思いました。私も活動中に、受け身の姿勢で、要望があるままこなし、方向性を見失いかけたことがありました。そんなとき、教育関係者、同僚、CP……とかくいろいろ話せる相手がいたことが、軌道修正と支えになったと感じています。信頼できる人が増え、話しができる、自分の考えがほかの人に伝わり、周囲の協力を得て事が進むのではないかと思います。

文=協力隊経験者

- 中南米・幼児教育・2015年度派遣
- 取り組んだ活動

県教育事務所の支所に配属され、主に、幼稚園での技術指導(情操教育や「当番活動」の紹介など)、県内の幼稚園教員を対象とした定期研修会や、幼稚園での研究授業などを行う。

目標の具体化

私も目的を失い「なぜここに来たんだろう?」と悩んだことがあります。「やりたい」事を絞れず、目標を具体化できていなかったからだと思います。私の場合はソフト面とハード面とひとつずつ目標を立て、数値化、具体化し、すべきことをブレイクダウンしました。そして、帰国から逆算し、スケジュールを立て、PDCAを回していると、考え込む時間もなくなり、結果、悩むこともなくなりました。気づいていないようで1年目ですっきり種まき→成長できているようなので、目標をしっかり持ち、帰国まで逆算しスケジュールを立てればよい結果が生まれると思います。

文=協力隊経験者

- アフリカ・柔道・2014年度派遣
- 取り組んだ活動

刑務官へ柔道指導を行った。ソフト面では派遣国本土の柔道大会で指導チームが総合優勝。またハード面では稽古を行う柔道場がなかったため、民間企業や団体とコラボをし、畳を日本から調達し、配属先と協働で現地に柔道場を建設した。

受け身の姿勢で活動していたら、 自分の存在意義があやふやに

文=生田卓也さん(ベナン・小学校教育・2016年度次隊)

ベナン北部の都市にある視学官事務所(日本でいう教育委員会)が配属先で、実際の活動は視学官事務所ではなく、現場となる小学校で行っていました。1年目は小学校の授業見学から始め、徐々に先生と一緒に授業をするなどの活動を行いました。配属先となる視学官事務所にはなるべく毎日顔を出してあいさつしていましたが、上司は出張や巡回、会議などが多く、会えない日がほとんどでした。授業はしていたものの、報告する相手がおらず、成果も感じられない。そんな毎日が続くうち、何のためにベナンに来たのか見失い、「自分では必要とされていないのではないか」という思いを抱くようになりました。

1年が経とうとするとき、配属先の方々と企画調査員(ボランティア事業)の方を交えての中間活動報告会がありました。その報告会ではこの1年の活動を振り返り、残りの1年の活動目標を設定します。その中のディスカッションの時間で、配属先の方々から、私の活動に満足してもらえていること、そして私の強みである算数の指導をもっと先生たちに広めてほしいという話になりました。

そのときまで、率直にここまで期待されているとは感じていませんでしたが、それを聞き、今後も頑張っていこうという気持ちが芽生えました。また、そこで気づいたのは、活動において受け身の姿勢であったということです。

それまでの私は、学校で気になることやこうしたいと思うことを先生たちに伝えることはありませんでした。学生時代から社会人時代を振り返ると、やるべきことを与えられることがとても多く、活動もそういうものだと思っていました。ところがあつたのだと思います。それに対して隊員は何かをしないといけないということとはなく、自分のやりたいことを考えて、具現化していきます。受け身の姿勢ではうまくいくわけがなかったのです。

以来、受け身であるという自分自身の弱みを強く認識し、算数の研修会や動画作成などをできるだけ自分から提案するようになりました。その結果、研修会は全部で7回行い、延べ500人以上の先生たちが参加してくださりました。1年目の終わりに自身の弱みと失敗に向き合える報告会という機会があり、よかったですと思っています。



図工の研修会に参加した現地の教員と生田さん。研修会では、蚊とりペットボトルと、紙を用いて民族衣装を作成した



PROFILE

1987年生まれ、大阪府出身。早稲田大学政治経済学部卒業後、(株)栄光で塾講師、教室長、教室運営に携わる。16年9月、協力隊に参加(現職参加)。18年9月、帰国し、復職。

活動概要

ベナンの北部都市ナチテンゲー視学官事務所に配属され、ナチテンゲー市内の小学校の小学校卒業試験の合格率向上を目標に以下の活動を行う。

- 管轄小学校の巡回、授業
- 算数や図工などの研修会実施
- 算数の授業指導に関する動画作成

派遣人数は少ないもの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

#H112

言語聴覚士

派遣中 ▶ 2人

累計 ▶ 44人

分類 ▶ 保健・医療

活動例 ▶ 病院や学校における言語聴覚療法の技術移転など

類似職種 ▶ 理学療法士など

※人数は、青年海外協力隊派遣実績、2019年3月31日現在。



配属先の地方病院のスタッフと田實さん（中央）。残念ながら活動期間内に全看護師が嚥下障害に関する講習会を受講することは叶わなかったが、協力者の看護師が講習会を引き継いでくれた。「職種や部門、企画ごとに協力者を得たことで自身の活動の幅も広がった」と田實さんは振り返る

#B424

番組制作

派遣中 ▶ 1人

累計 ▶ 30人

分類 ▶ 公共・公益事業

活動例 ▶ 放送局での番組の質向上支援、テレビ・ラジオ番組の制作など

類似職種 ▶ 映像

※人数は、青年海外協力隊派遣実績、2019年3月31日現在。



番組コンテンツの強化に向けて、ベトナム文化体験の日本人リポーターとして出演する福元さん

PROFILE

1989年生まれ、神奈川県出身。2012年北里大学を卒業とともに言語聴覚士国家試験に合格。東京都町田市にある多摩丘陵病院リハビリテーション部へ言語聴覚士として入職。主に成人分野での経験を積み、16年に退職し、協力隊に参加。18年10月、帰国。その後、世田谷区内の訪問看護ステーションに就職し、地域での在宅リハビリテーションに従事。

活動概要

- コスタリカの国立地方病院にて、以下の活動を行う。
- 医師、看護師、栄養士、理学療法士を対象に嚥下障害に関する講習会実施
 - 主に看護師を対象に嚥下評価の実施練習
 - 栄養士とともに嚥下障害対応食の作成
 - 患者やその家族、介助者向け勉強会の実施
 - 嚥下障害についてのパンフレットの作成 など



たじつなお 田實奈央さん
(コスタリカ・2016年度2次隊)

PROFILE

1986年生まれ、宮城県出身。2008年、西南学院大学文学部外国語学科を卒業後、宮崎のケーブルテレビ局へ入社。顧客管理業務や、電話・窓口対応業務を経て、念願の制作部に異動。約6年間、記者、リポーター、編集など、番組制作全般に携わる。16年に退職し、協力隊に参加。18年7月に帰国。

活動概要

- ベトナム国営の外国語放送局（VTV4）にて、ベトナムに住む日本人や現地の日本語学習者を主な視聴対象とした日本語番組「ジャパンリンク」の質の向上を目指し、下記の活動を行った。
- 日本語原稿の添削
 - ベトナム人スタッフへの日本語アナウンス技術指導
 - 番組認知拡大に向けた広報活動 など



いなもとひろこ 福元浩子さん
(ベトナム・2016年度1次隊)

Q 各職種の代表が出席する活動計画会議で、活動内容を説明する機会を得

Q どう解決しましたか？
講習会の定期的な開催に至るまでが苦勞しました。配属先に同職種がおらず、嚥下障害の基本的な知識が不足した状況だったため、まずは言語聴覚士の専門性や講習会の必要性を各職種に理解してもらう必要がありました。対象者が多かったため、個別ではなく全体に向けた説明会を実施したいと考え提案をしましたが、カウンタート（以下、CP）である医師が多忙であることやコスタリカ人特有ののんびりした時間感覚から、なかなか実施に至らず、気持ちもややもやした時期でした。

Q メインの活動は？
医療技術の進歩や高齢化などにより、近年コスタリカでも嚥下障害を発生する患者が増えています。日本の病院であれば言語聴覚士が中心になって評価やリハビリを行います。コスタリカでは、多くの病院に言語聴覚士が配置されておらず、医療従事者の嚥下障害への理解も浅い状態です。そこで、医師や看護師、栄養士、理学療法士による嚥下障害の適切な評価の実施を目指し、約300人を対象に、講習会や実施練習を行いました。

Q 活動の最大の困難は？
講習会の定期的な開催に至るまでが苦勞しました。配属先に同職種がおらず、嚥下障害の基本的な知識が不足した状況だったため、まずは言語聴覚士の専門性や講習会の必要性を各職種に理解してもらう必要がありました。対象者が多かったため、個別ではなく全体に向けた説明会を実施したいと考え提案をしましたが、カウンタート（以下、CP）である医師が多忙であることやコスタリカ人特有ののんびりした時間感覚から、なかなか実施に至らず、気持ちもややもやした時期でした。

Q メインの活動は？
同僚のひとりが「完璧に原稿を読みたい」と言ったので「特別特訓」を実施。練習は彼女の自主性を尊重して行

Q 活動の最大の困難は？
技術は向上した一方で、私と録音ブースに入ると、その完成品には私の手が加わっていない「独り立ち」はできていない状態。同僚がもう少し踏み出すための方法を考えあぐねていました。

Q どう解決しましたか？
同僚のひとりが「完璧に原稿を読みたい」と言ったので「特別特訓」を実施。練習は彼女の自主性を尊重して行

Q 活動の最大の困難は？
日本語番組のベトナム人スタッフへの日本語アナウンスの技術指導です。同僚であるスタッフは4人で、日本語の日常会話に支障はありませんでしたが、非母国話者特有の癖が目立っていました。また、アナウンサーの経験が浅いため、視聴者により伝わりやすくするためのアナウンス技術が不足。そこで前任者同様、アナウンス技術の指導を行いました。従来の指導は、録音前から同僚と一緒に隊員が録音ブースに入り、1対1で教える方法。しかし、同僚が隊員に頼ってしまい自主性に欠けていました。そこで、隊員に頼らなくても、同僚同士が協力すれば問題を解決できると気づいてもらうため、グループレッスンの実施を提案。これにより教え合いや自主練習の習慣が身につ

Q どう解決しましたか？
同僚のひとりが「完璧に原稿を読みたい」と言ったので「特別特訓」を実施。練習は彼女の自主性を尊重して行

Q メインの活動は？
同僚のひとりが「完璧に原稿を読みたい」と言ったので「特別特訓」を実施。練習は彼女の自主性を尊重して行

Q どう解決しましたか？
各職種の代表が出席する活動計画会議で、活動内容を説明する機会を得

Q 活動の最大の困難は？
講習会の定期的な開催に至るまでが苦勞しました。配属先に同職種がおらず、嚥下障害の基本的な知識が不足した状況だったため、まずは言語聴覚士の専門性や講習会の必要性を各職種に理解してもらう必要がありました。対象者が多かったため、個別ではなく全体に向けた説明会を実施したいと考え提案をしましたが、カウンタート（以下、CP）である医師が多忙であることやコスタリカ人特有ののんびりした時間感覚から、なかなか実施に至らず、気持ちもややもやした時期でした。

Q メインの活動は？
同僚のひとりが「完璧に原稿を読みたい」と言ったので「特別特訓」を実施。練習は彼女の自主性を尊重して行

Q 活動の最大の困難は？
日本語番組のベトナム人スタッフへの日本語アナウンスの技術指導です。同僚であるスタッフは4人で、日本語の日常会話に支障はありませんでしたが、非母国話者特有の癖が目立っていました。また、アナウンサーの経験が浅いため、視聴者により伝わりやすくするためのアナウンス技術が不足。そこで前任者同様、アナウンス技術の指導を行いました。従来の指導は、録音前から同僚と一緒に隊員が録音ブースに入り、1対1で教える方法。しかし、同僚が隊員に頼ってしまい自主性に欠けていました。そこで、隊員に頼らなくても、同僚同士が協力すれば問題を解決できると気づいてもらうため、グループレッスンの実施を提案。これにより教え合いや自主練習の習慣が身につ

Q どう解決しましたか？
同僚のひとりが「完璧に原稿を読みたい」と言ったので「特別特訓」を実施。練習は彼女の自主性を尊重して行

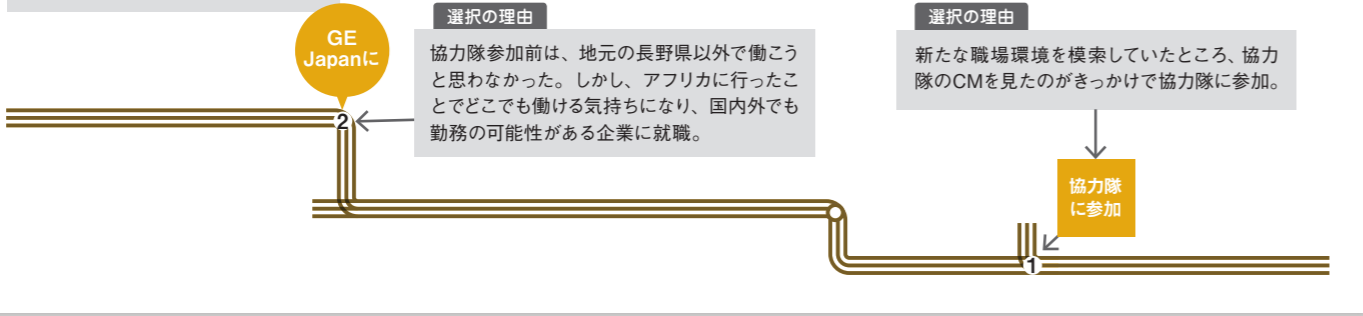
Q 活動の最大の困難は？
日本語番組のベトナム人スタッフへの日本語アナウンスの技術指導です。同僚であるスタッフは4人で、日本語の日常会話に支障はありませんでしたが、非母国話者特有の癖が目立っていました。また、アナウンサーの経験が浅いため、視聴者により伝わりやすくするためのアナウンス技術が不足。そこで前任者同様、アナウンス技術の指導を行いました。従来の指導は、録音前から同僚と一緒に隊員が録音ブースに入り、1対1で教える方法。しかし、同僚が隊員に頼ってしまい自主性に欠けていました。そこで、隊員に頼らなくても、同僚同士が協力すれば問題を解決できると気づいてもらうため、グループレッスンの実施を提案。これにより教え合いや自主練習の習慣が身につ

Q どう解決しましたか？
同僚のひとりが「完璧に原稿を読みたい」と言ったので「特別特訓」を実施。練習は彼女の自主性を尊重して行

Q メインの活動は？
同僚のひとりが「完璧に原稿を読みたい」と言ったので「特別特訓」を実施。練習は彼女の自主性を尊重して行

※嚥下障害…飲み込む動作がうまくできない状態

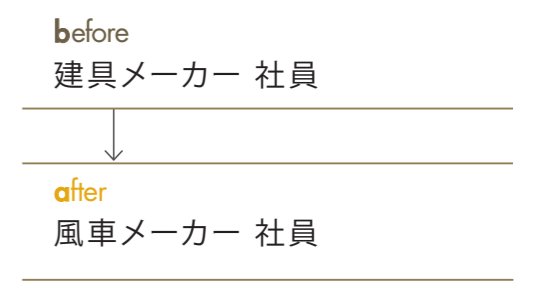
1984	2005	2008	2011	2014	2015	2017
長野県出身。	4月、東京にある専門学校 の造園土木科を卒業後、長 野県の造園会社に就職。	建具メーカーに転職。	3月、青年海外協力隊に 参加①	3月、帰国。 友人の農業を手伝う。	4月、フランス企業のア ルストムに入社(その後、 同社はゼネラル・エレク トリックと経営統合)②	12月、GE・インターナシ ョナル・インク風力事業部天 北O&M事務所所長を務める。



縣さんの背後にあるのは、建設前の風力発電機のブレード(羽)。風力発電機は、通常ブレード、ハブ、ナセル、タワーの4つで構成されている。風車の中心となるハブにブレードが3枚刺さり、ハブの後方に発電機などが入ったナセル、ナセルの下にタワーがある。天北ウインドファームの風車は、タワーは高さ約80メートル、ブレードは1枚が約53メートル、約12トン、ナセルは約86トンある。「タワーの中も、ナセルの中も結構広いんです」という一方で、「高いところが好きというわけではない」と縣さん



before ▶ after 人生を変えた2年間



帰国後の就職活動では、昔から一貫していた「現場で手を動かせる仕事」、協力隊経験のように「未知のものに挑める仕事」を探した。そんなとき「PARTNER 国際キャリア総合情報サイト」で風力発電機のO&M(オペレーション(運用)とメンテナンス(保守))の業務を見つける。「これまで見たこと

環境に負荷をかけず資源をつくる

無理解せず、歩み寄って「ここは一緒にやろうか」と関心を引いていきました」生徒たちは少しずつ真面目に木工の実技に取り組みようになっていったが、道具のメンテナンスを伝えるには至らず、3年の任期を終え、日本に帰国した。



配属先の隣町にある小学校の机を修理し、納品後に状況を視察に行く縣さん(右端)

「風力発電もその技術者もまだマイナーなイメージがありますが、今後成長が期待される産業です。業務では多国籍の人とやりとりし、語学力も生かせるので、協力隊経験者が活躍できる仕事だと思います。アフリカでも風力発電は増えているので、いつかアフリカで風車の仕事に携わりたいですね」

「だからといって、急に来た日本人がアレコがなかった風力発電機」に心を惹かれたことに加え、ボツワナでのインフラの不足とメンテナンスの大切さが思い出された。縣さんは、2015年にGE・インターナショナル・インク風力事業部に入社。静岡県、島根県の事業所を経て、現在は、稚内市で天北O&M事務所の所長を勤めている。

「だからといって、急に来た日本人がアレコがなかった風力発電機」に心を惹かれたことに加え、ボツワナでのインフラの不足とメンテナンスの大切さが思い出された。縣さんは、2015年にGE・インターナショナル・インク風力事業部に入社。静岡県、島根県の事業所を経て、現在は、稚内市で天北O&M事務所の所長を勤めている。

※ http://partner.jica.go.jp/

日本のエネルギーを支える

縣秀樹さん

ボツワナ・木工・2010年度4次隊

建具店を営む父の影響で、小さい頃からものづくりが好きで、いずれ父の仕事を継ぎたいと漠然と思っていたという縣さん。高校の農業土木科で造園の面白さを知り、造園土木の専門学校に進学後、地元の造園会社に入社。庭園の造園などに携わったのち、建具メーカーに転職し、組子技術を用いて日本家屋の障子建具や欄間などをつくっていた。仕事は好きだったが、工場で一生働くことは考えられず何か新たな環境を模索していたところ、協力隊のCMが流れた。環境を変えて、ものづくりの仕事ができるのであれば、と参加を決意し、応募。合格後、仕事を退職した。

ボツワナにある職業訓練校に配属された縣さん。配属先は地方にあり、赴任当初は驚きと戸惑いの連続だったという。生活でまず驚いたのは、週に数回の停電と断水だ。現地の人たちは不便に感じていないようだが、日本との違いを何よりも実感した。また、活動では物のなさに驚いた。机や椅子などの家具製作を通し、生徒に木工技術を伝達することを目指したが、必要な道具がほとんどない状態。購入手続きのために書類を作成しても、書類は誰かの手で止まってしまふ。苦勞して手続きを完了させ、店に行っても物が無い。さらに、学校には木工用の電動工具はあるものの部品が故障し、放置されていた。業者に修理を依頼しても必要な部品がなく、結局壊れたまま。「導入後、自分たちでメンテナンスする大切さを痛感した」と縣さんは振り返る。最低限の道具で生徒に家具製作を教えたが、出来上がった作品の質の低さに戸惑った。職業訓練校は卒業後、身につけた技術で生計を立てる人がいる一方、学校に在学していれば国からお金がもらえるのでそのため授業を受ける人もいたのだ。ものづくりの意識は自身の感覚とあまりに異なっていた。「だからといって、急に来た日本人がアレコ

*1 建具(たてく) …玄関のドアや和室の障子やふすま、窓やサッシなど住宅の開口部につけられる仕切りの総称。
*2 組子(くみこ) …釘を使わずに木を組み付ける技術。



理想 現実

帰国後のとを語り合う

OB・OG 匿名 座談会

第⑤回 環境教育隊員篇

進路開拓のタイミング

A 私は大学の法学部を卒業し、不動産会社に8年ほど勤務してから協力隊に参加しています。退職しての参加だったのですが、帰国した時点ではどのような道に進みたいかが定まっておらず、とりあえずJICAの進路相談カウンセラーに相談してみました。すると、「派遣国のペースで過ごしているうちは、採用面接も通らない。気になる求人があったら、積極的に応募してみなさい」というアドバイスをいただきました。そこで、応募する前にあれこれ悩むのはやめようと決め、帰国の1カ月後に応募したのが、現在勤務している団体です。技能実習生を監理する団体なのですが、派遣国では能力も意欲もあるのにそれに見合った仕事に就くことができていない人を何人も見てきており、そうした人たちをサポートできるやりがいのある仕事だということで就職を決めました。結局、応募したのはその1件だけで、帰国の3カ月後に働き始めています。

B 私は大学の環境情報学部を卒業した年、社会人経験なしで協力隊に参加しています。派遣中に「海外で修士号を取ってからの国際協力の仕事に就こう」と考えるようになったのですが、帰国した当初はまだ迷いがありました。そこで、まずは環境NGOと開発コンサルティング会社でアルバイトをしながら、進路に関する情報を集めることにしました。そのなかで、「就職すると長期の休みを取るの難しい」という話を聞いたことから心を決め、昨年9月に英国の大学院に入学しました。「環境科学」について学ぶ1年間のコースです。

C 私は大学の経済学部を卒業し、金融機関に3年半勤めてから、退職して協力隊に伝えたいことを紙にまとめ、それを使って発表するという方法で乗り切っているのですが、これは、協力隊時代にスペイン語力の不足を補うために試し、うまくいった方法でした。

仕事力の変化

B おふたりは私と違い、日本で社会人経験を積んでから協力隊に参加されていますが、外国の方と付き合う力のほかに、仕事に関して協力隊経験によって成長したと感じる点はあるのでしょうか。

A 変化はあるのだろうと思うのですが、「ここがこう変わった」と具体的に説明するのはなかなか難しいです。強いて言えば、協力隊時代は「予定は未定」「約束は破られるのが当たり前」という中で活動でしたから、先が読めない状況であっても、なんとか対応していこうと考えられる柔軟さは身に付いたかなと思います。

C 協力隊の募集説明会などで体験を話す際、いつもBさんのような質問をされるのですが、私はそのたびに答えに窮しています。派遣前より少しは心が広くなり、人のミスや欠点を許せるようになったかなとは思っていますが、今の仕事にどう生きていくのかというところは、やはり「こうだ」とは言いづらいです。

A 「柔軟さ」や「心の広さ」などは、自分がそれを発揮して仕事をスムーズにする分にはいいのですが、周囲の人にもそれらを求めてしまわないよう気を付ける必要があるのだらうと感じています。というのも、私は帰国して働き始めた当初、その点で失敗してしまっただけのことです。日本では「二手先、三手先」を読むことや、ミスが少ないことなどが仕事の美德とされています。ところが、私は技能実習生

参加しています。おふたりと違い、私は派遣中に転職活動を始めました。というのも、帰国が近づくにつれ、派遣国ののんびりとしたペースを帰国後も引きずり続けてしまったらだめだ、任期を終えたらすぐに働き始めたいという気持ちで非常に強くなっていったからです。帰国の3、4カ月前には転職エージェントに登録し、スカイプで日本企業の面接を受け始めています。そうして、帰国してから1カ月あまりで現在の勤務先であるIT関連企業に就職することができました。ただ、後から振り返ると、あんなに早く転職活動を始めなくても良かったかなという気持ちもあります。協力隊を経験したうえで旅行をすれば、訪れる地域の見え方が以前とは違うだろうと思うのですが、就職すると長めの旅行をするのが難しくなってしまうからです。

A 私も帰国後の進路について考え始めたのは派遣中だったのですが、当時は日本の「空気」を感じることができないため、帰国後に自分ができるような考えを持つようになるのが読めませんでした。

B 私も任期の半ばには「帰国後はどうしよう」という焦りが出始めたので、日本の先輩方にメールなどで相談したのですが、やはり「日本の空気を吸ってみたい」と、進むべき道はわからない」と言われたことがありました。そうしたアドバイスもあって、帰国してからじっくり考えようと腹を括ることができたのでした。

協力隊経験の発揮

C 私はこれまでのところ、外国企業の日本支店から仕入れる製品を担当している

の受け入れ企業の方に、先々のことをよく考えないまま、配慮の足りない対応をしてしまい、「きみの上司はその対応を承知しているのか」と咎められてしまったのです。そこではたと、「協力隊時代の感覚が知らず知らずのうちにしているのだ」と気づき、以来、日本と派遣国の働き方の違いをしっかり意識するようになりました。

今後のビジョン

B 私は大学院を修了した後、これまで勉強してきた「自然環境」の分野で国際協力の仕事に就きたいと考えています。おふたりの仕事の拠点は日本国内かと思いますが、「いつかまた海外に出て仕事をしたい」といった願望はないのでしょうか。

A 協力隊時代に「海外での仕事をやり切った」という感覚があるので、今は日本での暮らしを確かなものにしていこうという気持ちのほうが強いです。ただ、たとえ職場が変わることがあっても、外国の方とかわる仕事に携わり続けたいと思っています。

C 私も当分は地に足を付けて今の仕事で頑張ろうという気持ちです。ただ、私は協力隊時代の派遣国がとても好きで、ホストファミリーや友人、知人と「WhatsApp」で頻りに連絡を取り合ったりしているくらいです。そのつながりは失いたくないと思っています。

B 私も「地に足を付けて」とは思っていますが、一方で、転職を繰り返しながら、今を全力で生きている派遣国の方々の楽しそうな姿もとても印象的でした。ですので、私はいろいろな生き方のなかから自分に合ったものを見つけていければと考えています。

ため、業務で外国語を使うことはないのですが、いずれそうした機会は必ず出てきます。その点で、現在の勤務先は協力隊経験が活かせる職場だろうと思っています。

A 私の勤務先も海外とのつながりは強いのですが、海外出張では通訳が付きますし、技能実習生も日本語を学んでから来日するケースが大半ですから、業務ではさほど外国語の能力は必要とされていません。しかし、外国の方と付き合う力は必要な職場であり、その点では協力隊経験が非常に役立っていると感じています。たとえば、技能実習生の行動や発言は日本人とずれていることも多いわけですが、それにいちいち苛立ったりすることもなく対応できる。また、彼らの真意を推し量り、それを日本の受け入れ企業に伝えることで、両者の橋渡し役を担うこともできています。

B 私もアルバイトという立場ではありましたが、勤務先のNGOがシンポジウムなどで外国の方を受け入れる際、自身が協力隊で「外国人」になった経験をもとに、「彼らはこういうことを不安に感じるとしています」といった意見を出すことができました。

A Bさんが協力隊時代に使っていたのはスペイン語だと思えますが、大学院で英語の授業に付いていくのは難しいのでしょうか。

B 入学した時点での私の英語力は本当に低いレベルでしたから、今でも先生の話その場で理解できているかと言うと、まだまだという感じです。しかし、講義の音声やスライド資料が学生に公開されますので、わからない箇所はそれらで確認することができま。レポートの作成も時間がかかってしましますが、これまでなんとか単位を落とさずに済んでいます。グループワークなどは、あらかじめ

* 技能実習生…開発途上国等の人材育成への寄与を目的とした技能実習法（2017年施行）に基づき、日本に滞在して就労する開発途上国等の人。

生活に役立つ技

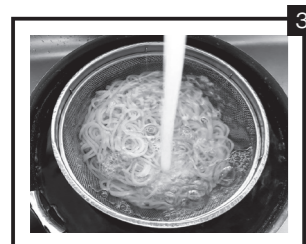
あるもので日本の味

ナビゲーター = 佐藤省吾さん
(ボツワナ・コンピュータ技術・2015年度1次隊)

なんちゃって焼きそば

派遣当時に考案したこのレシピ。レシピを発明したときは、小躍りしたほどの完成度でした。

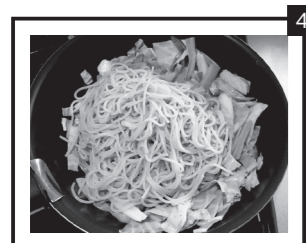
中華麺はスパゲティを重曹でゆでてもちもち中華麺風に。ソースはウスターソースとオイスターソース、唐辛子粉を混ぜるとあら不思議、焼きそばソース風になりますよ。これをかけ合わせたらなんちゃって焼きそば風の料理に早変わり。



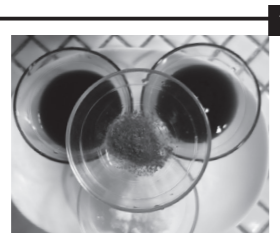
③ゆで上がったら、ザルにあげ、水洗いしてぬめりを取る。

【材料】(1人分)

- 【麺】スパゲティ: 150g
重曹: 大さじ1
- 【具】人参やキャベツなど好きな野菜と肉: 適量
油: 大さじ2
塩・コショウ: 適量
- 【ソース】ウスターソース: 大さじ1
オイスターソース: 大さじ2半
唐辛子粉: 適量



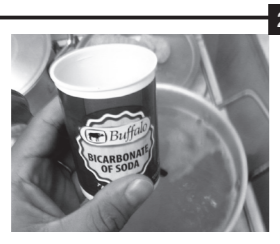
④フライパンに油をしき、適当に切った野菜と肉を炒め、野菜と肉に火が通ったら麺を投入する。



①ウスターソースとオイスターソース、唐辛子粉を混ぜておく。



⑤①でつくったソースを投入し、麺と具材によく絡めて完成。何となく唐辛子でごまかされている気がするけど、なるほど焼きそば……だ。



②沸騰した湯に重曹を入れ、スパゲティをゆでる。このとき泡が立つので吹きこぼれに注意。ゆで時間は袋に記載されているものより2分長めに。

知ったく情報

アングーマネジメント②

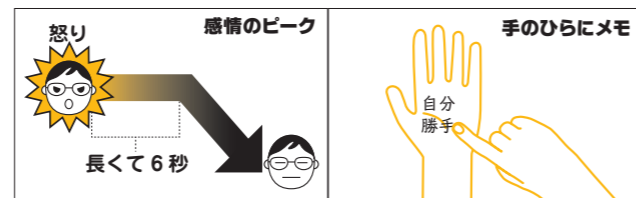
ナビゲーター = 北澤彩子さん
(旧姓・大和田/ケニア・理数科教師・1997年度2次隊)、
一般社団法人日本アングーマネジメント協会ファシリテーター

怒りの対処方法

前号では、怒りの感情自体は悪者ではないこと、動物に本来備わっている必要な感情のひとつであり、問題となるのはその表現方法であることをお伝えしました。

それでは、怒りを感じたときにはどうすればいいのでしょうか。今回は、その対処方法を暗号を使って考えていきましょう。

暗号①「6秒」



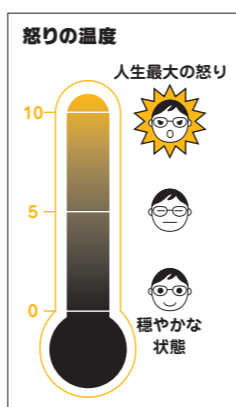
怒ったときに絶対にやってはいけないこと、それは、反射的に何かを言い返す、やり返すこと。そのような行為は、信頼や人望を失い、自身の心身の健康にも悪影響を及ぼすなど、いい結果を生むことはありません。そこで、反射を防ぐために、「6秒待つ」という癖をつけましょう。

なぜ6秒なのか、それは一般的に感情のピークは長くても6秒と言われているからです。その間、別のことを考えることで、発作的な感情が治まってくるのです。

考えることは何でもいいですが、たとえば「掌にイライラしたことを指でメモする」「100から3ずつ引いた数を紙に書いてみる」などのように、体を使うことがおすすめです。体を使うことで、怒りに我を忘れるのではなく、冷静になるのを助けてくれます。

また、この6秒の間に、イライラ、怒りの温度を計ってみましょう。10段階のどの程度なのか数値化することで、感情の度合いを客観的に捉えることができるようになります。これを繰り返すことで、必要以上に強く怒るなどの失敗がなくなっていきます。

今回は、6秒待った後の2つ目の暗号をお伝えします。お楽しみに!



活動に役立つアイデア

アイスブレイクの手法③

ナビゲーター = 菊地格夫さん(コスタリカ・気象学・1999年度3次隊)
元JICA専門家(参加型保護区管理)、NGO RASICA代表

心が温まる・協調性を生み出すアイスブレイク(IB)

今号では、温かい気持ちになり、協調性を生み出しやすいアイスブレイク (IB) を紹介します。このIBでは、参加者全体やグループで自己の本音の感情を開示し表現することで、他人を理解し受け入れやすくなります。参加者同士仲良くなってほしいときや、チームワークが必要なとき、逆に参加者内に対立があってそれを緩和したいときなどにも有効です。ワークショップ (WS) の初めではなく最後に行ってもよく、その場合、緊張をほぐすというよりは、関係をより深める効果が期待できます。

アイスブレイク (IB) の基礎情報

IBの目的: 初対面同士の参加者の不安や緊張を和らげ、発言や対話をしやすい雰囲気をつくりあげること。WSの始まりなどで使用する。

IBの基本ルール: WSを進行するファシリテーター (FT) は、「否定しない」「コメントは常に前向き」「なるべく全員にかかわる」。また、FTは、対象人数やスタイル、開催時間によってIBの構成を柔軟に変えるほか、男女が偏らないように考慮する。

①グループからのラブレター

このIBは、グループで紙とペンを使って筆記で行います。IBが終わったときにラブレターをもらった後のようなうれしい気持ちになり、素敵なお笑顔になるのが特徴です。初めての参加者同士でも、人からどんな風に見られているのかを知ることで、自己理解や自己肯定を進めるのに有効です。

グループからのラブレター

- 所要時間: 5~10分
- 人数: 3人以上 (3~6人のグループで)

- 参加者それぞれに紙とペンを持たせます。長方形の紙は縦に使います。
- 長方形の紙の長辺を半分に折る (二つ折り/開くと折線が1本できる) ように指示し、さらに同じ方向に2回、半分に折る (二つ折りを合計3回行う) ように指示します。開くと折線が7本できていることを確認します。
- 開いた紙に、折り目によって区切られた横に細長い長方形 (以下スペース) が8つできていることを確認します。
- 1番上のスペース (上から1番目) に自分の名前を書き、1番下から2番目のスペース (上から7番目) に自分の良い所、長所を「ポジティブな」言葉で書くように指示します。書き終わったら、1番下のスペース (上から8番目) だけを折線に沿って上に折り、先に書いた言葉を隠すように指示します。
- その状態の紙を、グループ内で時計回りのような一定方向に順で回し、交換し合うように指示します。次の順では、自分のところに来た紙の1番下のスペース

▼長方形の紙

きくち ただを
上から2番目
上から3番目
上から4番目
上から5番目
上から6番目
創造力がある
ここは空欄

ース (上から6番目) に、1番上のスペースに記入された人の名前を見て感じたその人の印象や性格、態度などについてのよい点や褒め言葉、長所などを、なるべく短くかつ「ポジティブな」表現で書き込むように指示します。書き終わったら、その下のスペースを折線に沿って上に折り、書いた言葉を隠すように指示します。書く時間は1枚につき1分以内がよいでしょう。FTが時間ごとに次に回すよう指示し、次も同じようにポジティブな言葉を記入して同様に折り上げていくよう指示します。

⑥全員が記入し終わり、自分の名前が書かれた紙が手元に戻ってきたことを確認したら、参加者に開けて読むように伝えます。最後にFTは、どんな気分になったかそれぞれ自分で考えてみることを、ラブレターをもらったようなうれしい気持ちは、自尊感情 (セルフエスティーム) や自己肯定感を高め、自分や他人に優しくなれる、という学びを参加者に伝えます。

②大切な順番 (構成的グループエンカウンター)

このIBは、いじめのないクラスづくりなどに使われている「構成的グループエンカウンター (※)」という手法を応用したものです。参加者の自己開示を進め、言動や態度の元となる考え方や生活習慣、文化背景などを知ることで、お互いの理解を深めます。習慣や文化の違う参加者や、対立などが見られる参加者で構成されるWSで行うのが効果的です。

大切な順番 (構成的グループエンカウンター)

- 所要時間: 10~15分
- 人数: 3人以上 (3~6人のグループで)
- 用意する物: 3、4個の単語が書かれているシート (人数分)

- 【始める前に】** WSのテーマによって絞り込みますが、3、4個の比較できないような単語が書かれたシートを用意します。例えば、「愛、お金、家族、友人、地球、動物、人間、自然」などから選択し、「愛 家族 地球」というように記入したシートを作成しておきます。準備する時間がない場合は、配布した紙にFTが選んだ単語を書き込むよう指示します。
- 参加者それぞれにシートを配り、ペンを持たせます。
 - 紙に書かれている複数の単語に自分で考えた「大切だと思う順位」をつけるように指示します。数字を書き込むように指示するとよいでしょう。また、なぜその順位なのかの理由も説明できるように考え、余裕があればメモするよう指示し、3分程度で終わらせるようにします。
 - 順位をつけ終わったら、1人1分以内で自分のつけた順位とその理由をグループ内で簡潔に発表し合うよう指示します。FTは全体を観察して、特定の人が長く話さないように注意を配り、グループごとに声をかけ時間を管理します。
 - 全員が発表し終わったことを確認し、さらに5分程度で、グループ内で質問し合うように指示します。その際相手の意見を否定してはいけないことを強調します。時間がきたら終了します。
 - 最後にFTは、どんな風思ったかそれぞれ自分で考えてみることを、多様な意見の背景には個人の考えや文化・習慣の違いなどバックグラウンドがあることを知り、お互いに認識し合うことが大切であることを参加者に伝えます。
- 【ポイント】** グループ内での相互理解を参加者全体に広げるためには、時間はかかりますが複数回行う必要があります。特定のグループやクラブ活動、複数回開催されるWSなどでは、毎回グループを変えて行うことで、互いに気をつかい合える関係を、時間をかけて広げていきます。

※構成的グループエンカウンター…「構成」は条件設定をするという意味で、「エンカウンター」は本音を表現しあい、それを互いに認め合う体験のこと。これらをグループで行う。

その医療情報大丈夫?

インターネットを通して医療情報が簡単に手に入るようになった現代、医療従事者顔負けの医療情報を持っている方にお目にかかることもしばしば。とはいえ、トラブルも多く耳にします。

正確な医療や健康に関する記事は、作成がとても難しいと現役の医師でさえ頭を悩ませています。キャリアで得た知識に加え、国内外の本や論文を数点読んだり、厚生労働省や総務省・WHO・専門の学会ページを参照したりするなどの土台が必要となります。

また、昔から健康にまつわる正しいと思われていたことが、医療の進歩により解明され、実は思い込みだったということはたくさんあります(右記参照)。

出典が信頼できる医療機関の情報かどうかの確認は常に必要ですね。情報はうのみにせず賢く上手に取り入れていきましょう。

インターネット上にある医療情報は本当? 例えば……

■熱が出たときにはおでこを冷やす→×

ひんやりとして気持ちが良く心理的に症状が和らぐ場合はその限りではありませんが、首やわきの下、足の付け根などの大きな血管が通る部分を冷やした方が解熱効果を期待できます。

■風邪をひいたらお風呂に入ってはいけない→×

長風呂や入浴後に体を冷やすのはよくありませんが、入浴で体を温め汗をかき、水分補給をすることで回復を早めることができる場合もあります。

■魚の骨が喉に刺さったらご飯を丸のみ→×

ますます粘膜に突き刺さってしまいます。耳鼻科を受診しましょう。

■アトピー性皮膚炎にステロイド剤は使わない→×

正しく使うことで効果が期待できます。高価な健康食品などにも要注意。

など



機構史の表紙

『国際協力機構史 1999-2018』を 発刊

旧国際協力機構と旧国際協力銀行の海外経済協力部門が統合して現在の組織の姿になってから、2018年10月で10年を迎えました。これを機に、編纂を進めてきた『国際協力機構史1999-2018』が、このたび完成しました。

本書は、組織統合以降のJICAの歩みだけではなく、それ以前の旧組織で年史が作成されていなかった期間(1999年から2008年までの約10年間)も対象として、過去20年間の組織の軌跡を正確に記録に留めることを目的として編纂されました。

「信頼で世界をつなぐ」をビジョンに掲げるJICAのこれまでの歩みを知ることで、より良い国際協力やこれからの世界の中の日本のあり方を考えて頂く一助となる一冊です。

▶『国際協力機構史』(PDF版)

<https://www.jica.go.jp/about/history/index.html>

スポーツによる持続可能な開発とは? TICAD7を控え、元野球選手が講演

3月17日、東京・新宿区のJICA市ヶ谷ビルにおいて、「持続可能な開発とスポーツの可能性-TICAD×青年海外協力隊」が開催されました。アフリカ開発会議(TICAD)を8月に控え、スポーツ分野での国際協力の意義について伝えるこのイベントに、日本ブラインドサッカー協会専務理事の松崎英吾さんとブルキナファソ野球代表監督を務める出合祐太さん(ブルキナファソ・野球・2007年度4次隊)が登場。協力隊への応募を検討する人やスポーツ分野・国際協力分野の関係者、隊員経験者など参加者は100人を超えました。

11年前にブルキナファソに派遣された出合さんは、「当時の教え子たちが成長し、代表選手になった。10年後を見据えた活動をしたことで、今がある」と、協力隊活動は現在も続いていると話しました。また、「開発途上国でのスポーツ分野の活動は、その普及自体が目的ではなく、スポーツを通して現地の人が『大切だと思えるもの』を育むことが重要。大切なものがあれば、人は努力し、成長できる」と、スポーツの可能性を伝えました。



登壇した出合さん

2019年度1次隊の派遣前訓練が開始

4月25日より、2019年度1次隊の派遣前訓練が始まりました。駒ヶ根訓練所は、174人(JV=147人、SV=2人、日系JV=24人、日系SV=1人)、二本松訓練所は161人(全てJV)が入所し、JV、SV共に7月3日まで訓練を受け、その後各国に派遣されます。(4月5日現在)

JICAによる進路開拓支援情報 「教員採用試験対策講座」

JICAでは、帰国後の円滑な進路開拓を支援するため、各種支援(帰国後研修、自治体向け及び企業向け帰国報告会・交流会、勉強会・ワークショップ、教育訓練手当支給など)を充実させています。その支援のひとつで、教員を志望する帰国隊員に対し、教員採用試験対策として「教員採用試験対策講座」を実施しています。

講師=金山光一JICA進路相談カウンセラー

会場=JICA市ヶ谷ビル

詳しくは、以下のメールアドレスにお問い合わせください。

▶人材育成課 jvtpc-sinrosien2@jica.go.jp

回	日程	内容
第1~3回は終了		
第4回	5月11日(土)	模擬試験の実施・論文対策②
第5回	6月23日(日)	指導案を作成し、模擬授業を行う
第6回	7月28日(日)	2次面接対策、模擬授業①
第7回	8月5日(月)	2次面接対策、模擬授業②

*スケジュール・内容は変更になる場合がございますので予めご了承ください。

JICA海外協力隊への 外務大臣感謝状授与式・懇談会を開催



隊員代表あいさつをする高橋さん

3月28日、帰国したJICA海外協力隊への外務大臣感謝状授与式が、東京・新宿区のJICA市ヶ谷ビルにおいて開催されました。授与式には、帰国したJICA海外協力隊54人が出席し、鈴木憲和外務大臣政務官から感謝状を授与されました。来賓として「日本の国際協力 特に青年海外協力隊の活動を支援する国会議員の会」(JICA議連)に所属する三原朝彦衆議院議員、松下新平参議院議員、谷谷正明参議院議員のほか、青木愛参議院議員、伊藤忠彦衆議院議員、井上一徳衆議院議員、また現職参加の帰国隊員の所属先代表者も参加されました。

授与式では、鈴木外務大臣政務官に「これからも日本、そして世界で平和のために活躍してほしい」との言葉をいただきました。次に隊員代表として、高橋睦美さん(ケニア・コミュニティ開発・2016年度4次隊)があいさつし、「若者の能力開発に取り組み、発見と学びの尽きない2年間だった」と活動を振り返りました。授与式に続いて行われた懇談会では、伊藤雅治さん(SV/ザンビア・経営管理・2016年度4次隊)、村島正江さん(ソロモン・看護師・2016年度4次隊)が活動を報告しました。

いつ? どこ?

隊員関連イベント情報

JICAやその関連団体が主催・共催・後援などをするJICA海外協力隊関連のイベントをご紹介します。

5月
11日

日本も元気にする青年海外協力隊OB会 活動報告会・懇親会

東京

地域づくりなどの社会貢献活動を実践している協力隊OB・OGや地域で活動したいと考えている協力隊OB・OG、協力隊関係者などが東京に集合。地域での活動に興味がある方はぜひ参加を。

いつ? 5月11日(土) 13:00~20:30

どこ? JICA東京(東京都)

詳細 <http://blog.canpan.info/nippon-genki-jocv/archive/42>

5月18、
19日

隊員OB・OGも多数活躍 あーすフェスタかながわ

神奈川

多文化共生社会の実現にむけて開催されている「あーすフェスタかながわ」。協力隊OB・OGも多数企画運営にかかわっており、協力隊になじみのあるさまざまな国の屋台やパズルも出店します。

いつ? 5月18日(土)、19日(日) 10:00~17:00

どこ? 神奈川県立地球市民かながわプラザ(神奈川県)

詳細 <https://www.earthplaza.jp/earthfesta/>

開催中~
5月31日

ギャラリー展 JICA海外協力隊春募集

北海道

主に道東から派遣・帰国されたJICA海外協力隊OB・OGの方々から提供頂いた、選りすぐりの活動写真をキャプションと共に展示しています(春募集は終了しています)。

いつ? 3月23日(土)~5月31日(金) 7:00~22:00

どこ? JICA北海道(帯広)(北海道)

その他 春募集終了後も協力隊の説明資料などを配布

開催中~
6月30日

JICAペルー野球教室 写真展 南米に渡った日本の野球

神奈川

ペルー日系人協会設立100周年を迎えたことを記念して読売巨人軍のご協力をいただき実施された野球教室の様子を、富田全宣さん(ペルー・写真・2016年度2次隊)が撮影した写真で紹介いたします。

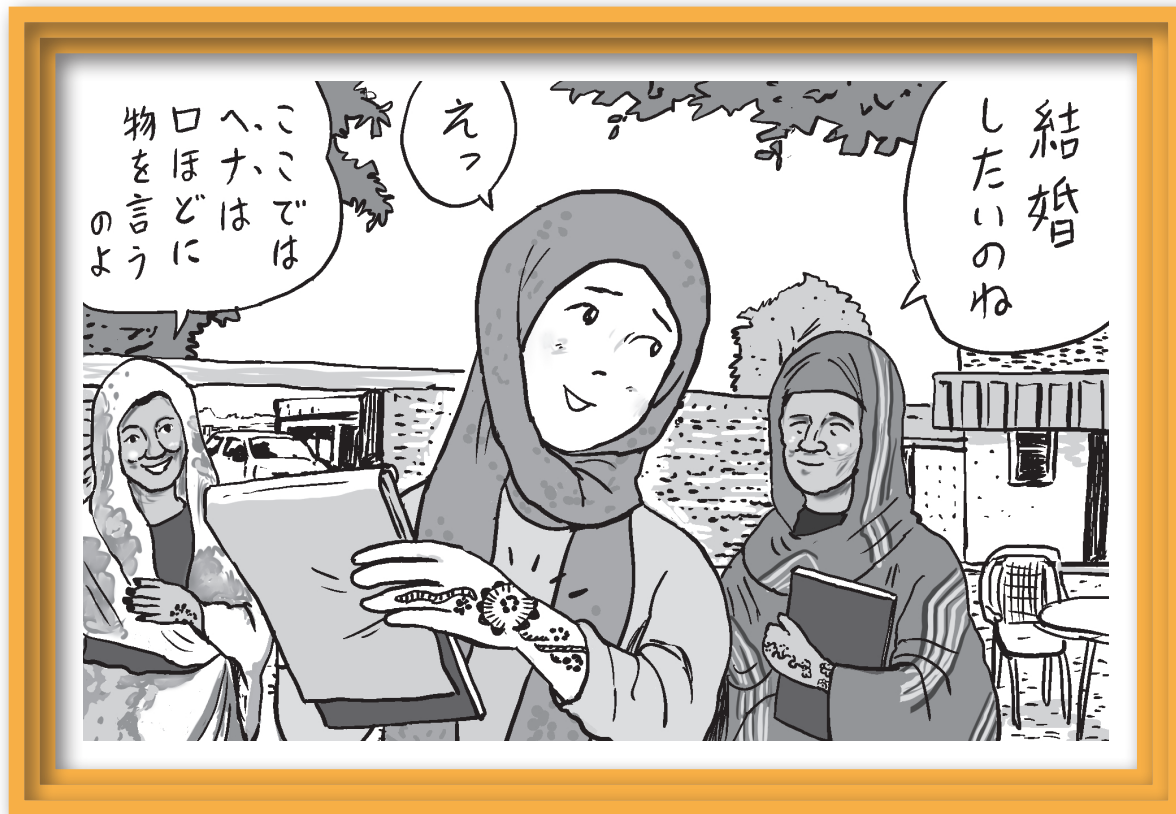
いつ? 3月30日(土)~6月30日(日) 10:00~18:00

どこ? JICA横浜(神奈川県)

その他 最終入館は17:30

つぶやき

お題 ▶ 初耳



イラスト=牧野良幸



今月の1枚

メッセージを受信されました

派遣国では、女性は結婚後、両手足をヘナで黒く染める。結婚していないとヘナはできず、女性の手を見ると未婚か既婚かがすぐにわかる。何も知らない私が、片手をヘナで染め職場に行くと、同僚に「結婚したいのね」と言われた。片手をヘナで染めるのは「結婚したい」というメッセージらしい。

ペンネーム：かんさん（女性） 協力隊員（アフリカ・学校保健・2018年度派遣）

*ヘナ…植物の名前、ヘナとも。染料などとして使用される。

★直前連絡

日本と違い、会議の連絡は基本的に1時間前。電話の着信に気づかず、会議室の前で子どもと遊んでいると、「早く来て！ もう会議は始まっているよ！」と焦った様子で私を呼ぶ同僚。「会議があること、今が初耳！」と私。「遅れてごめんね」と会議に参加するものの、会議の連絡もう少し早く教えて欲しいなあ。

ペンネーム：田舎暮らしのありえっちゃん（女性）
協力隊員（アジア・看護師・2018年度派遣）

★★★静寂の日曜日

僕の任地は県都で、街中にいろいろなお店があります。しかし、行ってみてビックリ、日曜日はお店がほぼ閉まっている！ 僕の唯一の休日でもあり、リフレッシュをしに外に出掛けるもほぼ閉まっているので、だいたい同じお店に入り、同じメニューを頼む。とはいえ、みんな日曜日は休んで家族との時間を大切にしている文化だと感じています。

ペンネーム：キャンディーボーイさん（男性）
協力隊員（中南米・野球・2018年度派遣）

★★★蜂蜜ホセ

派遣国では『ドラゴンボール』など、日本のアニメグッズが普通に売られている。同僚たちもアニメ好きで、『黄金バット』や『月光仮面』など、親世代(?)のアニメを話題に盛り上がっている。先日は『ホセ・ミエル』について熱弁していた。ちなみに「ホセ」は人名、「ミエル」は蜂蜜の意、『みなしごハッチ』のスペイン語訳である。

ペンネーム：30代さん（男性）
協力隊員（中南米・病虫害対策・2018年度派遣）

募集中のお題

「パーティ」「最新技術」「知恵袋」

投稿は『クロスロード』編集室まで
(P35をご覧ください)

あなたのつぶやきが
イラストになるかも!?

就職・進学を始め各種情報の提供など帰国隊員の進路決定までをサポート



JICA進路相談カウンセラー／ 青年海外協力隊相談役の紹介



今月の相談 (就活編)

よくある相談に進路相談カウンセラー／
青年海外協力隊相談役がお答えします。

Q. 就職活動で協力隊経験を
どう伝えたら良いでしょうか。

A. 協力隊経験で得た強みを
どう生かすのかを伝えましょう。

この疑問は、企業の採用担当者が何を(どのような人)を求めているかを考えるとわかります。企業の採用担当者が採用したい人物は、「うちの会社に貢献してくれる人材」です。従って、採用担当者は、「うちで何ができるのか」「どのようなことで貢献してくれるか」を知りたいのです。ですから、隊員が派遣国で何をしたかはあまり関心がありません。隊員が面接などで、派遣国に何をしたかを滔々と話せば「うちは、開発途上国じゃない」と反発するでしょう。そのため、途上国で何をしたかよりも、その活動を通し「できるようになったこと」「身についた能力」を具体的に、明確に伝えることが重要です。そして、「その強みを応募した会社でどう生かすのか」を伝えます。協力隊の活動内容を含めたそれまでの自分の体験と経験は、それらの能力などの「裏付け」となるものです。

進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役
に、進路・就活の悩みなど、いつでもご相談ください。



●経歴：航空会社で接客や財務、人事、CS推進などに携わった後、人材会社でキャリアカウンセラーとして早期退職者の再就職支援や職業紹介、キャリア形成支援に従事。2012年にJICA進路相談カウンセラーとなり、現在は青年海外協力隊相談役。

みなと かずお

湊 和生さん(青年海外協力隊相談役)

担当地域：北海道

✉ Minato-Kazuo@jica.go.jp

日本とは文化も価値観も異なる派遣国で、権限を持たずに、それでも期待された成果を残さなければならない協力隊の活動を通じて、皆さんはとても貴重な財産を身に付けて帰国します。そのひとつが「Diversityを受容する態度」です。“diversity”と聞くと外国人や外国の文化や価値観をイメージしがちですが、何も外国に限ったことではありません。「多様性」は、日本国内にも至るところで目にします。国内には各地の風習、慣習、人々の考え方等があり、それが存在するにもそれなりの理由があります。そして企業にもそれぞれの企業風土・企業価値があり、行動様式が存在します。帰国して、初めての土地、企業に入った時、それらを否定、拒否するのではなく、先ずは受容する。協力隊での体験を通じて身に付けた「Diversityを受容する態度」が皆さんを助けることでしよう。

ますだ ゆうき

増田 勇希さん(青年海外協力隊相談役)

担当地域：広島・鳥取・岡山・島根・山口

✉ Masuda-Yuki@jica.go.jp



私自身が青年海外協力隊OBとして、帰国後の進路や将来のあり方について考えたとき、どのように協力隊経験を仕事や地域で生かすことができるのか、さまざまな悩みに直面してきました。その後、多くの帰国隊員と出会い、それぞれに協力隊経験を生かしながら企業や地域で活躍する姿を拝見してきました。協力隊での2年間は、これまで考えることのなかった視点に学び・気づくとともに、だからこそ、さまざまな自分の可能性に思い悩む日々でもあると思います。皆さんが次のステップに進むにあたり、どんなことでも大丈夫です、ぜひ、気軽に声をお掛けください。

●経歴：野外教育ガイド、青年海外協力隊、(公社)青年海外協力協会での勤務を経て、市民活動、NPO等の支援を行う(特活)ひるしまNPOセンターに勤務、2019年3月より現職。現在は(特活)ひるしまNPOセンター理事のほか、災害復興支援や地域活性化に取組む多数の団体の運営にかかわる。

クロスロード

令和元年5月号 [第55巻第4号 通巻646号]
発行日 令和元年5月1日

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25
二番町センタービル

『クロスロード』ウェブ版は
以下のアドレスからアクセスできます。
<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



ご意見・ご感想をお聞かせください。 アイデアも大募集!

今号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか。ご感想・ご意見をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画や特集のテーマ、ご紹介いただけるアイデアがございましたら、下記のメールアドレスにお送りください。

以下のようなアイデア・
投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活での“失敗”談、お聞かせください。
- 活動や日常でちょっと役立つ、そんな技をお伝えください。もしくはこんな技を紹介してほしいというご要望もお待ちしています。
- P34の下に記載されている「お題」で派遣国での活動・生活のことをつぶやいてみませんか。
- 帰国後の就活・進路の悩みをお寄せください。



一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp





CROSS YELL!!

—先輩隊員からの置き土産—



当初はよく、「あなたは医師？」と尋ねられていました。

なごらたいき
文=柳楽大気さん

- ▶ネパール
- ▶公衆衛生
- ▶2017年度1次隊

PROFILE

1988年生まれ、島根県出身。保健所職員を経て、2017年7月、協力隊員としてネパールに赴任。19年7月に帰国予定。

活動概要

ガンダキ県タナフ郡ヴィヤス市の市役所に配属され、主に以下の活動に従事。

- 学校や地域での衛生教育や環境教育の実施
- 配属先による廃棄物管理の改善支援

私の配属先は、保健衛生と環境衛生を担当する部署。そのため、当初はよく「医師なのか？」と聞かれました。しかし、私は食品や感染症に関する衛生指導をした経験はあるものの、医療に関する資格はありません。配属先にはすぐに馴染めましたが、始めのうちは仕事がなく、悶々とした日々を過ごしていました。

やがて「このままではまずい」と思い、他部署の人の仕事に付いて回ったり、帰宅後に子どもたちにスポーツを教えたりするようになります。すると、次第に私の存在が認知され、活動先も見つかっていきました。しかし、そこで新たな困難に直面します。例えば、学校で手洗いの重要性について啓発しても、すぐに石鹸が置かれることは減多になく、中には水道が壊れているために手洗いが困難な学校も。現地で生活をしていけば、公衆衛生の課題もよく見えてきます。それだけに、自分の活動は現地の人の役に立っていないのではないかと、随分悩みました。

そんな中である日、ゴミ収集を手伝った際に、感染の危険がある医療廃棄物が一般ゴミに混ざって捨てられているのを発見しました。そこで私は、ゴミ集積場に足を運んで、混在する医療廃棄物の写真を撮影。それらを関係者に見せて問題を提起し、解決策について彼らと一緒に考えていきました。他方、収集作業を行う作業員には、手袋の着用などを呼び掛けました。やがて、私の問題意識を理解してくれる人も増えていき、医療廃棄物や生ゴミの分別収集がスタート。関係者

で喜びを分かち合うことができました。何よりの収穫は、ゴミの問題について考える人が増えたことでした。

専門知識がなくても、現場に通い、問題を提起することはできる。それがわかったことから、さまざまな所から啓発活動のリクエストをいただけるようになった後も、専門性にとらわれない幅の広い啓発ができるようになりました。

仕事に追われる日本の生活から一転、何もないところから活動を探し、仲間を増やし、教え、教えられた2年間。こんな経験は人生でこれっきりかもしれません。

＼YELL!!／
行ってみる!

話してみる! 経験してみる!

誘われたら断らない。すると新しい出会いや発見があります。また、さまざまな人と話せば、自分を知ってもらえます。さらに、活動に関係ない経験でも、そこから思わぬヒントが見つかることもあるはずです。



医療廃棄物の分別収集の開始日に集積場に集まった同僚たちと



今月号の表紙
カメルーン



かとうかずみ
文・撮影=加藤和美さん
(カメルーン・環境教育・2016年度3次隊)

この写真は、活動先の小学校で環境教育の授業をしたときの一枚です。「植物を使って顔をつくろう!」をテーマにした回で、生活の中に溢れている植物にもっと目を向けてほしいという思いで実施しました。自分たちで植物を探るところから始め、顔の輪郭だけ描かれた紙に、葉や枝を貼って顔をつくります。植物とてまったく同じ形や大きさのものはなく、一人ひとり個性に富んだ素敵な作品が出来ました! 自分の作品と一緒に、はいパシャリ☆